

【論文】

教育立国思想「興学私議」の形成と展開

—日本近代化と「米百俵」の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡（Ⅲ）—

信州大学 坂本 保富

はじめに

アヘン戦争の勃発（1840）から黒船来航（1853）へと急展開する19世紀中葉の極東アジア世界を舞台に繰り広げられた、欧米列強諸国による熾烈な植民地獲得の競争。その弱肉強食という世界状況の渦中に、否応なく取り込まれた鎖国日本の存在状況。それは、まさに風前の灯火であった。それ故、国内には欧米列強の外圧に対する危機意識が急速に昂揚した。幕末期を生きた同時代人の危機意識は、後世の人々の想像を絶するものであったに相違ない。当時の「力が正義」という欧米列強諸国による軍事的な支配原理の下で、一種の国際化現象（グローバリゼーション Globalization）が進行する新たな世界状況の中であって、日本は如何に対応すべきであるのか。国家民族の存亡に関わる緊要な問題であった。そのような危機的状況であって、日本人の選択しうる主体的な対応思想の一つとして形成されたのが、実は佐久間象山（信州松代藩、1811-1864）に象徴される「東洋道德・西洋芸術」という思想であった⁽¹⁾。

東西世界のボーダレス化という幕末期の時代状況を如実に反映した「東洋道德・西洋芸術」という思想は、開かれた新しい国際社会への日本人の対応指針として機能し、具体的には日本人の思惟行動の基盤を形成する伝統的な儒教思想から構築された儒学的洋学受容論として展開された。「西洋芸術」（西洋の近代科学）は「東洋道德」（東洋の人倫道德）と決して矛盾し対立するものではないが故に、進んで西洋日新の学問文化を学んでいくべきである、と象山は説いた。そのような彼の「東洋道德・西洋芸術」という思想は、幕末期における幕府諸藩の学校教育への洋学導入に理論的な根拠を与えると共に、その後の政治経済や学問文化の担い手となって近代日本の創出に生きた全国各地の青少年たちに、

大いなる勇気と希望を与えるところとなった。

如何なる学問思想も、教育的な媒介なくしては理解も普及もありえない。それ故に象山もまた、幾度かの私塾教育を通して「東洋道徳・西洋芸術」の実現に挺身した。彼の学問探究の人生は、同時に率先垂範の教育的人生であった。自らの学問思想を実践躬行する象山の姿は、数多の青少年の進路に大きな感化を与え、彼らをして西洋日新の学問文化の探究に向かわしめたのである。黒船来航に揺れる幕末期に多感な青年期を迎えて洋学と出会った大隈重信（佐賀藩出身、1838-1922）は、当時の青年たちに与えた象山の教育的な感化力が如何に大なるものであったかを、次のように回顧している。

当時、藤田東湖と佐久間象山とは、殆ど天下一般に承認せられたる有識者なりし。

二人の所説は固より同一ならざりしと雖も、これを尊信する青年書生の身に取りては、其の一言一句みな闇夜の光明の如くなりし。⁽²⁾

国家存亡の危機的状況の中で象山の警咳に接した青少年たちは、迷い悩める自己の存在を揺さぶられ、人生を左右するほどの強い感化を受けたのである⁽³⁾。象山にとっての私塾教育は、「東洋道徳・西洋芸術」に結晶する自己自身の学問思想の探究過程であり、同時にそれは、学問思想の対社会的な有効性を問うための実践活動でもあった。江戸に開設された象山の私塾には、現在、確認しうるだけでも北海道から九州に至る全国50余藩の青少年が入門して学んだ⁽⁴⁾。彼らは、象山塾において「東洋道徳・西洋芸術」という開国進取の新しい思想と出会い、世界的な視野から極東アジアの片隅に位置する島国日本を認識し位置づけることのできる新たな世界観を獲得し、それまでの伝統的な儒学を基礎として培ってきた日本人としての^{アイデンティティ}identityを喪失することなく、積極果敢に西洋日新の学問文化を摂取していこうとする、開かれた精神と態度を形成し実践していったのである⁽⁵⁾。

彼ら象山門人たちの幕末維新时期における進路と活躍は、尊皇開国に日本の活路を見いだそうとして倒幕運動に挺身した人々、幕府や維新政府に出仕して中央世界で活躍した人々、地道に出身地域の改革と発展に尽力した人々、新しい分野の開拓と発展に貢献した人々、等々、実に様々であった⁽⁶⁾。彼ら多くの門人たちの多種多様な活躍によってこそ、象山が生涯を賭して提唱し実践した「東洋道徳・西洋芸術」という思想は、近代日本の形成に有効な思潮となりえ、様々な人と時と場所をえて具体的な展開を示すところとなったわけである。

したがって、幕末維新时期という日本近代化の端緒の時期に形成され展開された「東洋道徳・西洋芸術」という思想は、単に象山個人のものとして完結し終息し評価されるべきものではなく、まずは彼の私塾に学んだ数多の門人たちの進路と活動を包摂した集合的全体として把握される必要がある。そう捉えることによってこそ、「東洋道徳・西洋芸術」という思想の意味と役割とが、歴史的な現実⁷⁾に即して理解されることになるといえるからである。

以下の論考は、上述のような問題意識に立脚して、一般には、昭和18年(1943)という太平洋戦争の最中に刊行された山本有三の戯曲『米百俵』の主人公として知られる、象山門人の小林虎三郎(1828-1877)に着目する。これまで彼は、郷里である越後長岡の戊辰戦後の復興に尽力した人物として評価されてきた。しかし本稿では、彼の思想と行動を、幕末維新时期における「東洋道徳・西洋芸術」思想の具体的展開という観点から分析する⁷⁾。もちろん、分析の対象とされるべきは、美談「米百俵」という彼に関わる歴史的事実の断片ではなく、彼の思想と行動の全体である。木をみて森をみない歴史理解であってはならない。如何なる大木といえども、それは森を構成する一本に過ぎない。「米百俵」の美談を、象山門人である虎三郎の思想と行動の全体の中に位置づけて捉えること、換言すれば美談「米百俵」の誕生する歴史的な必然性を、幕末維新时期の日本近代化過程における「東洋道徳・西洋芸術」思想の具体的な展開として把握すること。このような歴史学的な理解の視座こそが、今、美談「米百俵」の研究には求められているといえるのではないか。

それ故に、上述のような観点から日本の近代化過程に関わった「米百俵」の教育的思想世界にアプローチする研究の端緒となる本稿では、「米百俵」の主人公である虎三郎が、江戸遊学での象山塾を媒介として、恩師象山の提唱する「東洋道徳・西洋芸術」という思想世界の学習を踏まえて、安政年間の20代に形成した教育立国の思想、すなわち彼の処女論文「興学私議」に描かれた教育的な思想世界を取り上げ、その形成と展開の過程、さらには思想的な内容と特徴を明らかにすることを意図している。すなわち、「興学私議」という論文に結実した彼の教育立国思想を形成史的に把握し、その教育的な思想世界が、はたして恩師象山の教育理念であった「東洋道徳・西洋芸術」の思想と、如何なる歴史的な連関を有するものであったのかという問題意識の下に、幕末維新时期における日本近代化の展開過程に即して、彼が描いた思想と行動の軌跡を全体的かつ統一的に理解する新たな^{パラダイム}枠組を獲得すること、これが本稿に課せられた研究課題である。

(一) 象山塾への入門経過と入塾後の学び

(1) 長岡藩校崇徳館での学びの基礎

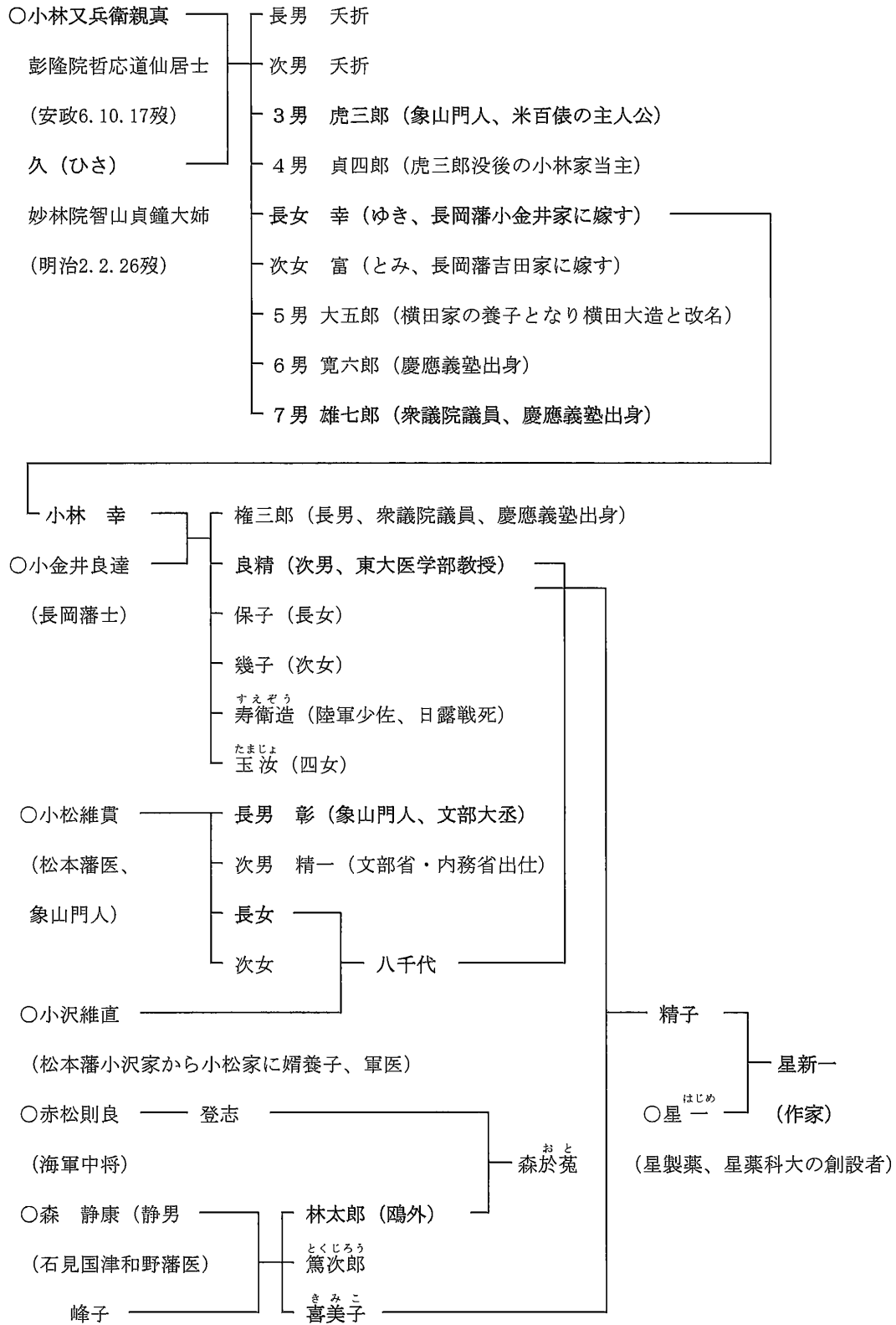
江戸中期の経世学者・林子平（1738-1793）は、晩年の名著『父兄訓』の中で「実に三歳児の魂百迄と云俗諺の如く、幼少の時の仕癖が、老年迄も附纏ふもの也⁽⁸⁾」と説いているが、近世日本の武家社会では、幼少期における家庭教育の重要性が広く認識され、特に父親が男児の基礎教育を担うのが一般的であった。虎三郎の場合もまた、そうであった。彼の人格と学問の基礎は、甥が「幼より厳父の庭訓を受け⁽⁹⁾」と証言しているごとく、父親である小林又兵衛（誠齋または厳松、不詳-1832）の家庭教育によって形成された、とみてよい。百石取りの越後長岡藩士であった又兵衛は、勇猛果敢な騎馬武者でありながら学問文化にも極めて造詣が深く、まさに知勇兼備の侍であった。それもそのはず、彼は若くして藩校崇徳館の「助教」や「督学」などの教職を歴任して新潟町奉行となり、一時は江戸の長岡藩邸で藩主世子（嫡男）の傳役（養育係）を務めたほどの人物であった。彼が、人格円満、識見高邁の学究的な人物と評される所以である⁽¹⁰⁾。

ところで虎三郎は、小林家の嫡男ではなかった。彼は、その名のごとく7男2女の3男であった。長男と次男が夭折してしまったがために、彼が家督を継ぐことになったのである（次頁の筆者作成「小林虎三郎家系譜」を参照）⁽¹¹⁾。それ故に嫡男となった虎三郎は、藩校に入学するまでは、家庭にあって、小林家の跡継ぎとして、幼少時から父親より厳格な文武両道の武士教育を受けて育ったのである。

その虎三郎が、家庭での基礎教育を経て藩校崇徳館へ入学したのは天保9年（1838）、数えて11歳のときであった。入校後の虎三郎は、「藩儒高野某に就いて学ぶ。又、山田某の教を受く⁽¹²⁾」と言われるごとく、幕府儒官・佐藤一斎（1772-1859）の門下生で藩校の都講（校長職）を務める高野松陰（1811-1849）、そして高野の後任の都講となった山田愛之助（1816-1896）など⁽¹³⁾、藩内一流の儒学者たちから儒学研究の基礎を学び取った。

彼が藩校で教えを受けた高野が、虎三郎が生涯の師と仰ぐ佐久間象山とは、同じ佐藤一斎の門人同士であったということは、偶然の奇縁であった。だが、さらに注目すべきは、もう一人の藩師であった山田との邂逅である。当初、藩校崇徳館に学んだ山田は、その後、

【小林虎三郎の家系譜】



(鷗外の東大医学部先輩・小金井良精の後妻、作家「鷗外の思い出」)

藩命を受けて江戸に遊学し、幕府儒官の古賀侗庵（1788-1847、寛政の三博士と評された幕府儒官古賀精里の子息）の門に入って儒学の研鑽を積み、古賀の私塾の塾頭にまで抜擢された人物であった。だが、彼の学問修業はこれに止まらず、さらに大阪の緒方洪庵（1810-1863）と並び称される江戸の西洋医学界の泰斗・伊東玄朴（1800-1871）に師事して蘭学をも学び、帰藩して藩校教授となった特異の人物であった。そのような洋儒兼学の山田から、はたして虎三郎が、何をどの程度まで学んだかは不明である。だが、少なくとも山田との出会いを通じて、彼は、間接的ながら蘭学—洋学との接点を持ち、東西両洋の学問を兼学することが可能であることを学んだであろうことは想像に難くない。

ともかくも、藩校入学後の虎三郎は、刻苦勉励して学問の研鑽に励み、才能を開花させていった。その結果、17、8歳の頃には藩主に非凡な学才を認められ、かつて父親が務めた「助教」に抜擢されることとなった⁽¹⁴⁾。当時の藩校崇徳館の教官は、「教授」と「助教」とで構成されていた。虎三郎が任命された「助教」の任務は、「凡初学の句読を授くることを掌どり、義理分明音韻雅正ならんことを要す。人才を教育するの本根。全て此の職に在り。」と規定される教職であった⁽¹⁵⁾。虎三郎は、藩校での職務を遂行しながら、さらなる学問への飛躍を期していった。嘉永3年（1850）、ついにそのときが巡ってきた。彼は、藩命を受けて念願の江戸遊学に旅立つこととなったのである。虎三郎、23歳のときであった。

（2）長岡藩関係者の洋学修行と象山塾

幕末期とはいえ地方から江戸や大阪などの大都市に学問修行に出ることは、経済的な負担も大きく、並大抵のことではなかった。雪深い越後長岡に生まれ育った虎三郎が、江戸に出て象山塾に入門した当時の長岡藩主は、第10代の牧野備前守忠雅（1799-1858）であった。彼は、開明的な人物であった。幕末期の日本を取り巻く危機的な国際情勢と、それに対応すべき国内課題についての的確な現実認識を持ち、激動する内外情勢に対応して問題解決に当たれる人材育成の必要性を自覚していた。それ故に彼は、人材の育成と登用とに意を用い、洋学—蘭学という当時としてはいまだ一般には認知されていなかった異国の学問修得を目的とした藩士の学問修行—遊学にも理解の深い人物であった。それもそのはずである。彼は、すでにアヘン戦争直後の天保14年（1843）には、弱冠25歳という

若さで幕府老中に就任し、以来、中央政界にあってアヘン戦争後の難局打開の重責を担った。特にペリー艦隊を迎えて日米和親条約を締結する際には、海防担当の老中次席として老中主座の阿部正弘（備後福山藩主、1819-1857）を補佐して活躍した人物である⁽¹⁶⁾。それ故に彼の治世には、越後長岡藩から洋学の学習を目的として江戸や大阪、さらには長崎へと、藩費で学問修行に赴く青年藩士が急増した。

長岡藩では、すでにアヘン戦争直後の弘化年間から、江戸の代表的な西洋医学塾であった伊東玄朴の「象先堂」には、後に藩儒となって藩校崇徳館を統括する朱子学者の山田愛之助が入門しており、これが先駆けとなって長岡藩関係者の同塾への入門者が相次いだ⁽¹⁷⁾。また、嘉永6年（1853）のペリー艦隊の浦賀来航を機に、西洋砲術家としては先駆的な江川坦庵（太郎左衛門、1801-1855）や下曾根信敦（金三郎、1806-1874）の私塾にも、西洋砲術や西洋兵学の修得を目的に、藩士を選抜して入門させている⁽¹⁸⁾。さらに大阪にある緒方洪庵（1810-1863）の西洋医学塾「適塾」にも、小山良運（1826-1869）をはじめとする藩士数名が入門している⁽¹⁹⁾。幕末期における長岡藩と洋学との関わりの中でも、特に嘉永期以降においては、西洋砲術・西洋兵学を含めた広範な洋学の学習を目的とした藩士の遊学活動が活発に展開された。とりわけ幕末期における軍事科学を内実とする西洋文明の積極的な受容現象は、当時の進歩的な諸藩にみられる一般的な傾向であった。

それでは、そのような学問状況の中で長岡藩と象山塾との関わりは、如何なるものであったのか。信州松代藩の象山が、江戸において西洋砲術や西洋兵学の教授活動を開始するのは、嘉永3年（1850）からのことである。以来、江戸での西洋砲術教授は、彼が長州藩出身の愛弟子である吉田松陰（1830-1859）の海外密航事件に連座して捕縛される、安政元年（1854）の4月まで継続した。江戸の象山塾は、4年足らずの短期間であった。実は、その期間における象山塾の門人を窺い知ることのできる史料「訂正及門録」がある⁽²⁰⁾。そこには長岡藩関係と推察される次の7名が記載されている⁽²¹⁾。

小林虎三郎（嘉永4年）、川嶋鋭次郎（河嶋永次郎、同4、6年に重複記載⁽²²⁾）、渡辺進（同4年）、河井継之助（同5年）、稲垣与一（同6年）、佐藤広三（同6年）、菅沼幾三郎（同6年）

嘉永4年における長岡藩の入門記載者は、小林虎三郎と河嶋鋭次郎（維新後に三島億二郎と改名）、それに渡辺進の3名であった。だが、同じ年の入門とはいっても、記載の順

序からみれば虎三郎が最初であった。したがって、長岡藩から象山塾へ入門した最初の人物は、虎三郎であったとみてよい。このことは、後述するような彼の入門経緯を知れば事実とみてよいであろう。すなわち、虎三郎の入門を皮切りに、長岡藩から象山塾への入門者が相次いだということである。

(3) 約束された象山塾への入門

儒教を経世済民の思想的基盤とする近世の徳川社会では、儒学教育を旨とする漢学塾を中心に、様々な私塾教育が展開された。近世私塾の教育世界では、入門手続きが重視されたが、とりわけその厳格さをもって知られていた象山塾の場合、入門者の入門経緯を分析してみると、多数の藩士が入門した佐倉藩や中津藩、さらに大野藩や土佐藩などのように、藩主自らが洋学者象山の信奉者となって藩士を藩命で集団入門させる場合が多かった。次いで、すでに入門している自藩あるいは他藩の友人知人の紹介で個人的に入門する場合、さらには地縁や血縁の人間関係に頼る場合、等々による入門がほとんどであった。

では、虎三郎の場合はどうであったのか。彼の象山塾入門への経緯は、象山の郷里である松代藩以外の場合では、少々、特異なケースであった。すなわち、虎三郎の象山塾への入門は、まだ彼が幼少の折りに、彼の父親と象山との間で交わされた約束事であったのである。百石取りの越後長岡藩の家臣であった父親の小林誠齋が、新潟町奉行の職にあった天保9年(1838)、たまたま信州松代藩の象山が藩命を帯びて越後に遊び、誠齋と出会った⁽²³⁾。その時、数えて28歳の象山は、前年に松代藩最初の藩費遊学生として2年間、江戸で昌平坂学問所頭取の佐藤一斎に師事して漢学を修めて松代に帰国し、自己の進路を朱子学を奉じる漢学者の道に定め、将来の大成を期していた。その彼が、江戸での学問成果をもって藩当局に「学政意見書」を上書して学政改革を進言したのも、越後を訪ねる前年のことであった⁽²⁴⁾。若き日に長岡藩校崇徳館で教鞭を執った学識豊かな虎三郎の父誠齋と、新進気鋭の儒学者として自信と希望に溢れる青年象山との邂逅を、虎三郎の遺稿集『求志洞遺稿』を編纂した外甥の小金井権三郎(1855-1925)は、次のように叙述している⁽²⁵⁾。

父誠齋、職を新潟に奉ずるの日、象山と邂逅す。一面旧の如く、交情甚だ厚し。且

つ象山博識多通にして議論卓越せるに服し、以て児を託し教を受くる者と為すは、世に独り斯の人有るのみ。因て之を象山に乞ふ。象山之を許す。是を以て象山に随従す。

(26)

誠斎は、博覧強記で鋭い論理的能力をもつ初対面の象山との談論風発を通して、彼の自信に満ちた自説開陳の語りの中に、非凡の才能を感得した。それ故、誠斎は、いまだ10歳を過ぎたばかりの少年虎三郎の教育を託すに足る人物として、象山を見定めたわけである。当時の象山は、やがて自分自身の進路に重大な衝撃と転換をもたらすアヘン戦争の勃発など夢想だにしえず、したがって誠斎もまた、新進気鋭の青年学徒である象山が、やがて洋学に進んで儒学との統合をはかり、日本の進むべき進路を指示する「東洋道德・西洋芸術」という思想の形成と実践に挺身する、波乱の人生を歩むことになるとは、全く予測もできなかったことである。ともかくも虎三郎の象山塾への入門は、実際の入門に10年余りも先だって取り交わされた、父親と象山との約束事であった。このような象山塾への入門動機は、他の門人たちの場合とは異なり、まさに「約束された入門」であったといえる。

(4) 象山塾の教育と虎三郎の学習状況

虎三郎の象山塾への入門は、前述のごとく象山側の門人帳資料によれば⁽²⁷⁾、嘉永4年(1851)のこととされる。だが、彼が藩命を受けて江戸に遊学するのは、その前年のことであった。ということは、江戸へ到着後の虎三郎は、すぐさま象山塾には入門せず、他の私塾に入門したということである。なぜ、象山塾に直行しなかったのか。甥が執筆した虎三郎の略伝には、「初め萩原某の門に入る⁽²⁸⁾」と記されている。すなわち、虎三郎が嘉永3年(1850)に江戸へ到着した後、最初に入門したのは、象山塾ではなく萩原塾であった。その間の経緯が、『長岡市史』には次のように述べられている。

川島(改名前の三島億二郎)より一年遅く、嘉永三年、二十三才歳の小林虎三郎(病翁)は、藩命によって江戸の萩原緑野の白鶴塾に学んだ。翌四年には佐久間象山の門に入り、蘭学と砲術を学び、優れた力量を表し、長州から来た吉田寅次郎(松

蔭)とともに「象門の二虎」と称された。⁽²⁹⁾

藩費で江戸遊学に出た虎三郎が、最初に入門した「萩原緑野」とは、いったい如何なる人物であったのか。その彼は、江戸で漢学塾「白鶴塾」を主宰し、長岡藩主牧野忠雅の養子で第11代藩主牧野忠恭^{ただゆき}(1824-1878)の恩師であった。さらに、第12代藩主の牧野忠訓^{ただくに}(1844-1875)もまた、萩野の門人帳「鶴塾生名簿」に名を連ねていたのである⁽³⁰⁾。いわば彼は、長岡藩お抱えの学者であったとみてよい。それ故に、虎三郎の萩野塾入門は、藩命による入門であったと推察できる。ともかくも、江戸に遊学した虎三郎は、萩野塾入門を経て、念願の象山の私塾に入門することとなる。この時、彼は24歳であった。

虎三郎が入門する頃の象山はといえば、越後訪問の後の天保9年(1838)に再度の江戸遊学が認められ、神田阿玉池^{おたまがいけ}に漢学塾(玉池書院、五柳精舎)を開設し、儒学者として一家をなした。さらに天保13年(1843)には、アヘン戦争を契機に江川坦庵や下曾根信敦に師事して西洋砲術・西洋兵学を修め、刻苦勉励してオランダ語を修得し、積極果敢に洋学の研鑽に向かった。そして嘉永3年(1850)には松代藩の江戸深川藩邸で西洋砲術・西洋兵学の教授活動を始め、翌4年に江戸木挽町に独立した塾舎を構えると全国諸藩から入門者が相次ぎ、洋儒兼学の学者として大成した。儒学から洋学を修めた象山の学問に対する世間の評価は、象山自身の意識や私塾の教育実態に反して、西洋兵学・西洋砲術を専門教授する軍事科学系の洋学者としてであった⁽³¹⁾。だが、近世私塾の教育界には、専門領域を超えて自由な競争原理が働いていたのである。それ故、当時の象山塾には、軍事科学系の西洋砲術塾の筆頭に挙げられる江川坦庵の私塾からはもちろん、西洋医学系の洋学塾を代表する伊東玄朴の「象先堂」や緒方洪庵の「適塾」など権威ある私塾からも、門人たちが象山の令名を慕って移動入門してくるという現象も多くみられた⁽³²⁾。したがって、虎三郎が入門した嘉永4年頃の象山塾は、全国各地から多数の入門者が参集して学び、対外的な危機意識の昂揚する幕末期の時代状況を反映して、異常な活況を呈していたのである⁽³³⁾。象山の郷里である信州松代藩の関係者はもちろん、同じ信州の上田藩や松本藩からも入門者が相次ぎ、さらに旗本やその陪臣たち、そして佐倉藩、田辺藩、田丸藩、姫路藩、小浜藩、津山藩、松山藩、徳島藩、大洲藩、土佐藩、熊本藩、中津藩、佐賀藩などの全国諸藩から、入門者が殺到していた。特に九州の中津藩や熊本藩、四国の土佐藩などは、多数の藩士を集団入門させていた。虎三郎が入門する前の著名な門人としては、木村軍太郎(佐倉藩、1827-1862)、高畑五郎(徳島藩、1825-1884)、武田斐三郎(大洲藩、1827

-1880)、山本覚馬(会津藩、1828-1892)、勝麟太郎(海舟、旗本、1823-1899)、津田真一郎(真道、津山藩、1829-1903)、本島藤太夫(佐賀藩、1810-1888)などがいた⁽³⁴⁾。

先に述べたごとく、象山塾は、西洋砲術、西洋兵学の教授を内実とする軍事科学系の洋学私塾として名声をえていた。それ故に、入門者の多くは武士階層であった。彼らは、黒船来航前夜の外圧に対する危機意識の高まりから、武士本来の国防意識に目覚めて入門するというケースが、最も一般的な入門動機であった⁽³⁵⁾。明治維新の後、文明開化を象徴する学術団体「明六社」の結成に参画し、日本最初の西洋法律書『泰西国法論』を著して、明治の司法界に重きをなした津田真道、あるいは初代の東京大学総理(後に帝国大学総長)となった加藤弘之(但馬出石藩、1836-1916)などの場合でさえもが、象山塾入門の目的は、実に単純明快、国防的動機からの西洋兵学修行であった⁽³⁶⁾。幕末期日本における洋学の急速な普及拡大は、何といたっても国防的動機から西洋軍事科学を学ぼうとする洋学学習者の急増によってもたらされた教育的現象であったとみてよい⁽³⁷⁾。黒船来航前後の対外的危機意識の昂揚する幕末期に、国防的契機から軍事科学系の洋学修得に向かった人々の典型的な入門への動機と意識を、虎三郎と同年に象山塾に入門した西村茂樹(佐倉藩、1829-1902)の場合にみることができる。彼は、象山塾入門の動機を次のように記している。

佐久間の門に入り砲術を学ぶに及ぶに、象山余に謂て曰く、砲術は末なり、洋学は本なり、吾子の如きは宣しく洋学に従事すべし、余の如きは(象山自ら云ふ)三十二歳の時始めて蘭書を学べり、吾子は余の学べる時に比すれば年猶若し、必ず志を起こして洋学を勉むべしと。余謂へらく、余、今西洋砲術を学ぶといへども其意は攘夷護国に在り、已に其術を得れば足れり、敢て彼の書を読むことを要せず、道德政事に至りては東洋の教は西洋の上^いに在るべしと。故に初めは象山の言を以て然りとせざりし。

(38)

しかしながら、虎三郎の入門には、すでにみたような経緯の下での「約束された入門」であったことや、入門以前の彼の学習経歴には、前述の津田や加藤、さらには西村の場合のような西洋兵学や西洋砲術への関心が全く認められず、明らかに彼らの場合とは異なっていた。実は、象山は、嘉永年間に虎三郎たちが入門する私塾、すなわち一般世間からは西洋砲術ないしは西洋兵学の塾と目される私塾を開設する前に、朱子学者としての大成を

期して江戸の神田阿玉池に漢学塾を開設していたのである⁽³⁹⁾。その彼が、清朝中国でのアヘン戦争を契機として、西村茂樹に「余の如きは三十二歳の時始めて蘭書を学べり」と諭したごとく、壮年にして猛然と洋学—蘭学の修得に挑んだのである。不眠不休で短期間の内にオランダ語の読解力を身につけた彼は、以後、オランダ語の原書から軍事科学を中心とする西洋新知識の獲得と検証に専心した。そのような学習成果をもって、黒船来航前夜の嘉永3年(1850)には、江戸深川の松代藩邸内に西洋砲術教授の看板を掲げ、さらに翌年には江戸木挽町に独立した塾舎を構えたわけである。それ故、洋学が儒学の基礎の上に学び位置づけられた彼の学問思想の内実においては、彼が江戸に開設した漢学と洋学の二つの私塾は、決して別物ではなかった。彼の私塾は、少なくとも彼自身の意識においては、東西両洋の学問を統合する学問的思想世界の実践的な場として考えられていた。したがって、嘉永年間の象山塾は、彼が生涯を賭して提唱し実践した「東洋道德・西洋芸術」という儒学的な洋学受容の思想形成とそれを展開するための教育的世界であった、と理解することができる⁽⁴⁰⁾。事実、「砲術の事等は誠に余業」と喝破する彼の私塾には、西洋砲術や西洋兵学など、西洋軍事科学の修得を目的とする入門者だけではなく、儒学や蘭学を学ぼうとして入門する門人もいたのである。いわば嘉永期以降の象山塾には、伝統的な儒学の学習、最新の西洋軍事科学技術の修得、そして蘭語学を中心とする洋学の研究という、三種の入門者が存在したという事実を否定することはできない⁽⁴¹⁾。だが、象山自身は、それら三種の学習目的に対応した教育を個別に展開していたわけでは決してなかった。彼は、全ての門人に対して、東西両洋の学問を統合した「東洋道德・西洋芸術」という思想的観点から、「西洋の学専ら修め申度と申すもの共に候へども、聖賢の大道を知らず候時は大本立ち不申候に付、課を定め候て四書等講明致させ候⁽⁴²⁾」という洋儒兼学の教育方針を徹底して貫いていた。それ故に彼の私塾では、東西両洋の学問が必須の学習内容として等しく求められていたのである。

虎三郎が入門を取り次いだと言われる同門の吉田松陰は、自らの入門当初における象山塾の教育状況を、地元長州の叔父宛に次のように報告している。

真田侯藩中佐久間修理と申す人、頗る豪傑卓偉の人に御座候。元来一齋門(佐藤一齋門人)にて経学(儒学)は良齋ごんさい(儒学者の安積良齋)よりよかりし由、古賀謹一郎(幕府儒官)いへり。良齋も数々しばしば是を称す。今は砲術家に成り候処、其の入塾生、砲術の為に入れ候ものにも必ず経学(儒教の学問)をさせ、経学の為に入れ候も

のにも必ず砲術をさせ候様仕懸けに御座候。西洋学も大分出来候由。会日ありて原書の講釈いたし申し候⁽⁴³⁾。

虎三郎の場合は、入門当初から単なる西洋砲術・西洋兵学に関する知識や技術、すなわち「西洋芸術」のみの習得が目的ではなかったもので、抵抗なく象山の学問思想の統合された「東洋道徳・西洋芸術」という全体世界の理解と修得に向かうことができたとみてよい。そのことは、彼のその後の思想と行動、とりわけ象山塾における学習成果として彼が恩師象山に提出した処女論文「興学私議」の内容とそこに一貫する思想をみれば明らかとなる。郷里長岡に暮らす父親の誠斎は、江戸の象山塾で学問修行に励む虎三郎を案じて、度々、象山に書簡を送り、象山もまた返書で虎三郎の勉学状況を報告していた。ある返書の中で象山は、虎三郎について次のように報告している。

才氣不凡、其上第一に志行篤実にて、当今多く得べからざる御人物と、他日に望み候処浅からずと存じ候。学東西を并せ術文武を兼ね候事、僕の志し候処に之れ有り候へば、其衣鉢、多分斯人に落ち申すべくと存候事に御座候。⁽⁴⁴⁾

また、私塾で門人たちの教育に当たっていた象山は、自己の学問的な到達点である「東洋道徳・西洋芸術」という基本思想に立脚して、前述の誠斎宛の書簡の中で引き続き、来るべき新時代の学問観を次のように披瀝している。

兎に角、此節と成り候所にては、漢土の学のみにては空疎の議を免かれず。又西洋の学ばかりにては道徳義理の講究之れ無く候故に（中略）是を合併候にあらざれば、完全の事とは致し難く候。（中略）東洋道徳、西洋芸、匡廓相ひ依りて圏模を完うす。大地の周囲は一万里、還た須く半隅を虧き得べきやいなや。⁽⁴⁵⁾

上記の誠斎に対する書簡内容からみても、松陰と共に「象門の両虎」と称されたごとく、虎三郎に対する象山の期待が如何に大きかったか、を窺い知ることができる。象山塾で虎三郎と親交の深かった松陰は、「虎三郎は才華にして、矩方（松陰）は則ち才粗なり⁽⁴⁶⁾」と、自らを卑下して虎三郎の才能を高く評価していた。しかし、将来の学問的大成を囑望された虎三郎ではあったが、思いもよらぬ時代の波に足を掬われることとなる。彼が

象山塾へ入門した後の嘉永6年（1853）6月、黒船来航という日本を震撼させる歴史的な大事件が勃発するのである。

（二）「東洋道徳・西洋芸術」への目覚めと「興学私議」の執筆

（1）黒船来航と象山塾師弟の対応

冒頭にも述べたごとく、嘉永年間から安政年間へと移る19世紀中葉の時期は、極東アジアの海国日本にとって、鎖国から開国へと向かう歴史的な転換期であった。このような時代状況に深くコミットして生きた象山や彼の門人たちにとっても、人生を左右する激動の時代であった。黒船来航という歴史的な出来事は、西洋砲術・西洋兵学という最新の軍事科学技術を教授する江戸で評判の私塾であった象山塾にとっても、厳しい受難の時代の到来を意味した。すなわち、象山自身や彼の門人たちにとって、私塾で探究してきた学問思想の現実的な有効性が問われる、まさに試練のときを迎えたからである。

嘉永6年（1853）6月、ペリー提督率いる米国艦隊の浦賀沖への出現は、一夜にして江戸市中を震撼させる一大事件となった。この出来事を、象山は、「僅か四艘の船に候所都下の騒擾^{そうじょう}大方ならず⁽⁴⁷⁾」と表現し、門人の松陰は、この時の象山塾の騒然たる様子を「佐久間並びに塾生等其の外好事の輩多く相会し、議論紛々に御座候⁽⁴⁸⁾」と記している。だが、塾主である象山は、この出来事を、すでに10年も前のアヘン戦争勃発（1840）のときに予測し、洋学の研鑽に向かっていたのであった。当時、日本の将来に深く関わるアヘン戦争の歴史的意義を鋭く分析した象山は、虎三郎の藩主である牧野備前守忠雅（1799-1858）と共に幕府の老中職（海防掛）にあった松代藩主の真田幸貫^{ゆきつら}（松平定信の第2子、1791-1852）に対して、「海防意見書」（一般には「海防八策」とよばれる上書）を提出していた。その上書の中で、彼は、植民地の獲得競争に凌ぎを削る西洋列強諸国の実態を、「元来道徳仁義を弁^{いて}ぬ夷狄^{てい}の事にて、唯利にのみ賢く候得ば、一旦兵を構へ候方己れの利潤と相成可申と見込候はゞ、聊^{いまま}か我に怨^{あだ}なくとも如何様の暴虐をも仕可申候」と分析し、その実像を、倫理道徳を蹂躪した弱肉強食の「力は正義」という侵略主義の論理と見抜いていたのである。19世紀の中葉に展開する一種の^{グローバリゼーション}globalizationとも呼ぶべき、悪

逆無道な侵略行為が罷り通る世界状況の下で、彼は、中国を陵辱^{りょうじよく}した欧米列強諸国が、早晚、日本に進攻してくるのは不可避であることを予言し、そのために日本が講ずべき対応策を進言していたのである⁽⁴⁹⁾。

したがって、ペリー艦隊が浦賀沖へ来航した際にも、彼は、重ねて祖国防衛上の建策を幕府に上書した。すなわち、海国日本の防衛上から「堅艦を新造して水軍を訓練すべき事」（海軍の設置）、従来の法制や慣行に囚われずに「短所を捨て長所を採り名を措て実を挙ぐべき事」（開国進取）など、10ヶ条の対応策をまとめた「上書」（一般には「急務十条」と呼ばれる上書）を、老中主座の阿部正弘（備後福山藩主、1819-1857）に提出した⁽⁵⁰⁾。

鎖国攘夷を不可として、開国を主張する象山が特に力説したのは、どの港を開港することが日本の国益に適うか、という問題であった。幕府当局が考える下田開港、あるいは一部の幕閣が画策する浦賀開港を、積極的な開国進取を主張する象山は、軍事的あるいは経済的な観点から全く否であると論破し、「横浜を以て直ちに互市場と為すに如かざるなり⁽⁵¹⁾」と、横浜開港を強く主張したのである。このような恩師象山の横浜開港説に共鳴した門人たちもまた、その実現を期して奔走した。まず、同じ長岡藩士で、虎三郎と同時期に象山塾に入門した畏友の川島鋭次郎（維新後に三島億二郎と改名）が、ペリー来航直後の嘉永6年12月、当時、老中次席の要職にあった長岡藩主の牧野備前守忠雅宛に「意見書」を提出し、「我短を捨て、彼の長を採り、須く兵制を改革して大に富国強兵の途を講ずべき⁽⁵²⁾」ことを進言した。だが、藩費で江戸遊学中という書生の分際で幕政に建議した彼の行動は、「書生の分際を以て藩政を云々するは借越⁽⁵³⁾」と断罪され、郷里長岡での謹慎処分を受ける結果となった。

畏友が処罰された直後の翌年の正月、今度は虎三郎が師説を奉じて藩主と幕府に建言した。だが、結果は同じであった。虎三郎もまた億二郎と同罪で処罰され、即刻、郷里長岡に帰藩の上、塾居謹慎を命じられたのである。大志を抱いて江戸に遊学した虎三郎であったが、安政元年（甲寅、1854）の春、帰郷するに際して、恩師象山に別離の挨拶に赴く。その際に彼は、恩師象山の下で東西両洋の学問を兼学するという学問への道半ばにして、江戸を去る無念の心情、畏敬する恩師象山との別離の淋しさを吐露した「甲寅の春、罪を獲て將に郷に帰らんとして、象山先生に留別^{りゅうべつ}し奉る（甲寅春。獲罪將郷帰。奉留別象山先生。）⁽⁵⁴⁾」と題する、次のような漢詩を詠んでいる。

粗率自知多漏遺	粗率自ら漏遺多きを知る
一朝獲辜又咎誰	一朝辜を獲るも又誰をか咎めん
故山伴父豈無樂	故山父に伴ふ豈に樂無からんや
此地離君太耐悲	此地君に離る太だ悲しみに耐へたり
学併東西志何挫	学は東西を併せ志何ぞ挫けん
術文兼武意聊期	術は文武を兼ね意聊か期す
索居偏恐長驕惰	索居（独居）偏に驕惰（臆病）の長ぜんを恐る
引領遙望規誨辞	領を引いて遙かに規誨の辞を望む

他方、愛弟子である虎三郎の処分を悲嘆した象山もまた、その著『省誓録』に、当時の心境を次のように記している。

門人長岡の小林虎をして、その主侯（老中職にあった長岡藩第10代藩主の牧野忠雅）に上書して、大計を開陳せしめ、又、之をして阿部閣老（老中首席の阿部正弘）の親幸する所を見て、為にその利害を論じ、時に因りて規諫することを得て挽回する所あらんことを欲す。並に皆行はれず。小林生は此を以て主侯の譴を得て、遂に辞して国に帰れり。⁽⁵⁵⁾

同門の松陰もまた、勇気ある虎三郎の行動に対する藩当局の処罰を痛み、「門人長岡藩臣小林虎三郎（師の見る所を聞き深く之れを然りとし）師の説を以て執政某侯の臣に語り。遂に諸生天下の事を議するの罪を以て藩、国に還し就かしむ。⁽⁵⁶⁾」と記している。

だが、同門知友の相次ぐ蹉跌を憂えた松陰もまた、同じ安政元年の3月、今度は師説を奉じて海外密航するという大胆な行動を企てる。しかし、結果は米艦から返送されて幕府の役人に捕縄され、連坐した恩師象山と共に江戸伝馬町の獄に繋がれることとなる。一般には知られていないが、松陰の海外密航という行動は、決して唐突なものではなかった。同じ象山塾に学ぶ二人の長岡藩士の勇気ある行動を伏線とし、その延長上において決起された覚悟の行動であったのである。幕末期の危機的な時代状況が、異常を異常と感じさせない大胆な判断と実行を促したとみてよい。彼らの行動は、当時としては、一見、暴挙と思える企てであったが、決して突発的な行動ではなかった。しかしながら、彼ら象山塾の門人たちの、少々、時代を先取りした非常の行動は、衰えたとはいえ、いまだ鎖国政策を

堅持しようとする幕藩体制社会においては、決して許容される勇気や冒険ではありえなかった。それ故に、虎三郎たちの勇気ある行動は処罰され、彼らの人生を左右する青春の蹉跎となったのである。

ところで皮肉なことに、松陰の密航事件に関して、この事実を知ったペリー提督は、「知識を増すために生命をさえ賭さうとした」日本の青年—松陰の行為は、「教養ある日本人の烈しい知識欲を示すもの」と高く評価し、罪の軽減を幕府当局に申し入れ、松陰のような青年のいる日本の前途を有望視していたのである⁽⁵⁷⁾。このような黒船来航時のペリー提督と松陰に関わる歴史的事実は、意外と知られてはいない。

なお、虎三郎は、維新後に自らが編纂した歴史教科書『小学国史』の中で、松陰の密航事件の経緯と恩師象山が捕縛され地元松代での禁固刑に処せられた歴史的事件について、次のように詳述している⁽⁵⁸⁾。

長門の士吉田松陰矩方虎次郎は、佐久間啓の門人なり。外国に往て、其情を探んと欲し、去年秋、長崎に至りて、之を謀り、遂ずして、江戸に還しが、彼理が船、横浜を去て、下田に泊するに及んで、其郷友金子重之輔と謀り、直に彼船に至て、俱に其国に往んことを請しかども、彼理聴ずして送還せり。前後の事、啓（象山）頗指示する所あり。幕府、国禁を犯すとなし、啓を二人に并て獄に下し、尋て各其藩に禁錮せり。啓、心を海防に潜ること十余年、天下の洋兵を講ずる者、争て其門に趨り、声望其盛なりしが、忽に罹て山中に蟄しければ、有志の士、深く之を惜たり。⁽⁵⁹⁾

上記のごとくに虎三郎は、義務教育の小学校で広く全国で使用されるべき歴史教科書に、松陰の海外密航事件の顛末を取りあげ、1頁近くものスペースを割いて詳述している。このことは、もちろん彼自身の心中に、自身と深く関わるこの密航事件に対する強い憤怒の情が潜在していたことは否めないところではある。だが、それ以上に、近代日本の誕生前夜に起きた出来事の意義を歴史に書き記し、後に続く子供たちに教え継ぐべきだという彼自身の「歴史を遠望する慧眼」が、強く働いていたものとみることができる。ともかく、ペリー提督率いる米国艦隊が浦賀に来航したという歴史的な事件は、塾主である象山と彼の門人たちの捕縛あるいは謹慎という思わぬ悲劇を招き、江戸における象山塾が潰滅的な打撃を被ったことは間違いのない歴史的事実であった。

(2) 恩師象山の教訓と長岡謹慎中の学究生活

安政元年3月、蟄居謹慎の罪をえて郷里長岡に帰藩する虎三郎に対して、松陰の密航事件に連坐して獄に繋がる直前の象山は、自己の思想的世界を端的に表現した、次のような漢詩一篇を贈って励まし、愛弟子を見送ったのである。

小林炳文に贈る

宇宙の間、実理二無し。斯の理の在る所、天地も此れに異なる能はず。鬼神も此れに異なる能はず。近来、西洋人發明する所の^{あまた}許多の學術、要は皆実理にして、^{まさ}砥に以て吾が聖学を資するに足れり。而して世の儒者、^{おおむね}類ね皆凡庸の人にて窮理を知らず。視て別物と為し、^{つと}啻に好まざるのみにあらず、^{やや}動もすれば之を^{こうしゅう}寇讐（敵）に比す。宜なるかな、彼の知る所之を能くする^な莫し。^{もうへい}蒙蔽深固にして、永く^{がいどう}核童の見を守る。此の輩、^{あいびん}惟々哀慙すべきのみ。以て^{しょうかく}商較（比較）を為すに足らず。大丈夫、^{まさ}当に大塊有る所の学を集め、以て大塊無き所の学を立つべし。小林^{へいぶん}炳文は吾に従って遊び、吾が言を^{よろこ}説ぶ者なり。其の帰省するに於て、書して以て之を贈る。⁽⁶⁰⁾

この象山の漢詩には、朱子儒学が説き示す「格物窮理」（物に格りて理を窮める）という実験的な検証原理の下に把握される「実理」（真理）は、東西の学問的な異同を超越した普遍性を共有するものであるとする彼の学問的信念と、そこから東西両洋の学問を等しく探究して止揚統一し、新時代に対応した新たな学問を構築すべきであるとする彼自身の学問観とが、簡潔明瞭に表明されている。このような東西両洋の学問の統合に関する弁証法的な観念の仕方こそは、彼における「東洋道徳・西洋芸術」という思想成立の基底をなすものであった。それ故に「東洋道徳・西洋芸術」という思想は、当時の^{ウエスタン・インパクト}「西洋の衝撃」に揺れ動く幕末期の時代状況にあつては、従来の儒学を中心として形成されてきた日本人の主体性を動揺させたり喪失させることなく、西洋日新の学問文化を積極的に摂取していくことの可能性を切り開く、儒学的な洋学受容論として展開される思想であった⁽⁶¹⁾。

虎三郎が長岡に帰った翌月、象山自身もまた松陰の海外密航事件に連坐して捕縛され、地元蟄居という幕府の判決を受ける。信州松代に囚われの身となった象山は、「吉田小林

二生の事、御尋に御座候所一向其後の様子承り申さず候。小林事は在所へ著し候ては何の咎も之れ無き事とは承り候⁽⁶²⁾」と、愛弟子である虎三郎と松蔭の身を案じている。だが、象山が信州に蟄居した後も、江戸の塾生たちとは、書簡や知人を介して断続的に音信が続いていた。特に虎三郎の場合は、蟄居先の越後長岡から書簡をもって信州松代の象山に種々の質問や依頼をしており、むしろ江戸の塾にあったとき以上に師弟の教育的関係は深まっていた。象山は、郷里の信州松代に蟄居して以後、従前にも増して洋学研鑽を中心とする学究生活に没頭する充実の日々を送り、自己の学問と思想のさらなる拡大深化をめざしていたのである。

他方、越後長岡に帰って謹慎生活に入った虎三郎もまた、江戸の象山塾で共に学んだ河井継之助（1827-1868）が家老職にまで登り詰めるという異例の出世ぶりとは対照的に、蟄居謹慎している自宅を「求志洞」と名づけて、病軀に鞭打ちながら蘭書の翻訳や論文の執筆という学究の生活に明け暮れていた。そんな中で、彼が添削を願って信州松代に住む恩師の象山宛に送った次のような「洋書を読む（読洋書）」⁽⁶³⁾と題する漢詩一篇がある。

洋儒窮物理	洋儒物理を窮め
輓近滋々精明	<small>ばんきんあすます</small> 輓近滋々精明なり
剖析入微眇	<small>ほうせきびびよう</small> 剖析微眇に入り
万象無遁情	<small>とんじよう</small> 万象遁情無く
創意製人血	創意人血を製し
全然若天成	全然天成の若し

洋人取磷酸鉄礫砂揮發華鷄子白食食塩四品而混合之、加以瓦爾華尼電気、經十二少時則化而為血、与天成之物無以異也

るしやききはつか
洋人磷酸鉄、礫砂揮發華、鷄子白食、食塩の四品を取て之を混合し、がるばにでんき
加ふるに瓦爾華尼電気を以てし十二少時を經れば則ち化して血と為る。天成の物以て異なる無きなり。

神会乃至斯	<small>しんかい</small> 神会乃ち斯に至る
造物豈無驚	造物豈に驚く無からん
味者卻娼嫉	味者は卻 <small>かえり</small> （却）て娼嫉し <small>ぼうしつ</small>
謗議謾縦横	<small>ぼうぎみだ</small> 謗議謾りに縦横す

何人執箴石　　何人か箴石を執りて
痛下破心盲　　痛下して心盲を破せん

〈意識〉

西洋の科学者は物質の真理を窮め、近年、益々精緻になってきている。物質の分析は微妙精緻に至り、万物の本質が明らかになってきた。人間の科学的な創意が人血を造れるまでになり、全く天然の物と変わりなくなっている。

西洋人は、^{ろしやききはつか} 燐酸鉄、^{ろしやききはつか} 礪砂揮発華（塩化アンモニアの昇華物）、鶏子白食、食塩の四品を混合して、特に^{がるぼにでんき} 瓦爾華尼電気（Galvani, 18世紀中頃のイタリアの生理学者）の場合などは、12時間を経れば則ち化合して人工の血液となる。本物の人血と何ら変わらない。

科学の神秘はここまできている。人間の創意工夫とは驚くべきものである。この恩恵を受ける者は、本質を知らないが故に、却ってこれを嫉み、悪口がみだりに広まっていく。一体、誰が、^{しんせき} 箴石（病気を治す石針）を以て痛みを与え、誤った考えを打ち破ることができるのか。

この漢詩からは、分析と合成の実験的手法を駆使した緻密で精巧な西洋化学に象徴される西洋の学問世界を知って驚嘆し、自らも西洋科学の探求に向かわんと知的好奇心を募らせている虎三郎の姿が彷彿とする。それは、かつて恩師の象山が、単に翻訳された蘭書の記述や他人からの伝聞による西洋知識を盲信せず、可能な限り自らが実験観察して事実を確認するという、徹底した西洋科学の体験的理解をめざした姿であり、そのような学問態度をこそ率先垂範して塾生に示そうとした象山塾の教育方針に通じる、さらなる学問探求への精神と態度であったといえる⁽⁶⁴⁾。

（3）教育立国思想「興学私議」の執筆とその内容

論文執筆の動機

恩師の象山は、愛弟子松蔭の海外密航事件に連座して江戸伝馬町の獄中であって、自らの来し方を省み、国家の将来を憂いて己の信ずる所に従って行動した自身の生き方の正当性を再認識し、当時の偽らざる心情を吐露した回顧録『^{せいけんろく}省愆録』を著した。幕府の取調の

結果、象山は信州松代で蟄居、松蔭は長州萩の野山獄で服役との判決が下されると、象山は、出獄の別離に臨んで松蔭の行く末を案じ、^{はなむけ}「餞」の言葉を手向けた。松蔭は、その時の様子を回顧して、次のように記している。

甲寅（安政元年、1854）九月、江戸獄を脱し、象山先生と別る。先生、時に余を顧みて曰く。「今吾が徒、謀敗れて法に坐し、復た為すべきものなし。然れども航海は今日の急務、一日も緩うすべからざるものなり。汝、^{なん}蓋ぞ力めて之れが書を著はし、本謀の然る所以を明らかにせざる」と。余、再拝して命を受く。^{すて}已に国に帰り野山獄に囚せられる。^{はじ}初めて獄吏に請ひて紙筆を求め、急に此の録を為す。実に先生の命を終ふるなり⁽⁶⁵⁾。

江戸伝馬町での恩師象山との約定を遵守すべく、松蔭が急ぎ長州萩の野山獄で執筆し、象山に送り届けた苦心の論考こそが、彼の代表作の一つとなった『^{ゆうしゅうろく}幽囚録』であった⁽⁶⁶⁾。象山は、愛弟子の松蔭が書き上げた『幽囚録』を一読してこれを喜び、詳細な添削批評を加えて、その出来栄を讃えた⁽⁶⁷⁾。

同じように虎三郎もまた、謹慎処分を受けて越後長岡に帰藩した後、「求志洞」と命名した自宅に籠もって、専ら学問研鑽の日々を送り、ついに安政6年（1859）の春、悪戦苦闘の末に一篇の論文を書き上げ、恩師象山に送り届けた。これが「興学私議」と名付けられた彼の処女論文であった⁽⁶⁸⁾。

松蔭の『幽囚録』、そして虎三郎の「興学私議」、これらは、門人たちが恩師の学恩に応えるべく必死に書き上げた論攷、いわば卒業論文とも呼ぶべき作品であった。両作品とも、象山塾での学究成果を踏まえて形成しえた、自身の学問思想を体系的に表現した力作であり、その後の彼らの思想と行動を支える基本思想となったものである。

処女論文「興学私議」の内容

「興学私議」は、数多の象山門人の中で最も誠実に象山の学問思想を継承した虎三郎の、教育的な思想世界の骨格を表現した論文であった。全文で四千文字を優に超える立派な漢文体で、しかも内容的には和漢洋三学の学問研鑽に励んだ虎三郎が、広く深い学識を駆使して執筆した「興学私議」は、標題の通り「興学」（国家統一的な学校教育の確立）によ

る「人材」（「東洋道徳」と「西洋芸術」とを兼備した人間）の育成こそが「国家万世富強治安」の根本であるとする教育立国主義の主張と、それに基づく具体的な教育改革案の提唱とを内容とするものであった。

処女論文「興学私議」の執筆は、虎三郎が数えて32歳、安政6年（1859）3月のことで、日米修好通商条約が締結される直前であった。彼が、嘉永6年（1853）7月のペリー艦隊の浦賀来航に際して取った非常行動を譴責され、長岡に蟄居謹慎してから、5年目の春であった。その間には、長く続いた徳川幕藩体制を揺るがす歴史的な大事件がいくつも起こり、日本は鎖国から開国へと大きな転換期を迎える。最初に開国への扉をこじ開けたのは、ペリー艦隊の来航に始まるアメリカであった。嘉永7年（1854）3月、幕府は、再度、日本に来航したペリー提督と日米和親条約を締結し、これを皮切りにイギリス（1854年7月の日英和親条約）、ロシア（1855年2月の日露和親条約）、オランダ（1856年1月の日蘭和親条約）と相次いで条約を結ぶに至った。

他方、幕府は、国防のための防衛改革にも着手し、オランダに協力を求めて急ぎ防備の西洋化を進めた。即ち、全国諸藩に武備充実を指令（1853年6月）、江戸湯島に鋳砲場を設置（1853年8月）、オランダ商館長に軍艦・銃砲・兵書の購入を依頼（1853年9月）、浦賀に造船所を建設（1853年11月）、御用地石川島を造船所敷地に決定（1854年1月）、日本最初の洋式木造帆船が竣工（1854年1月）、浦賀造船所で西洋型の大型帆船鳳凰丸が竣工（1854年6月）、大名旗本に洋式銃陣の修行を命令（1855年8月）、長崎海軍伝習所を開設しオランダ人教官の下で海軍伝習を開始（1855年12月）、洋学の教育・翻訳機関としての蕃書調所（洋学所）を開設（1856年3月）、江戸築地に西洋砲術を含む武術を教授する講武所を開設（1855年4月）、等々の軍事科学の西洋化政策が矢継ぎ早に展開されたのである。ペリー来航後の内外情勢を把握していた虎三郎は、幕府が展開する採長補短の改革政策、特に人材育成に関する教育政策を厳しく分析し、自らの学問的成果をまとめ上げたのが論文「興学私議」であった。その冒頭で、彼は、次のように述べている。

中国（日本国のこと）、虜（欧米諸国）の侮を受くるや久し。昔嘗て安きに狎れて^な 勞を憚り、之を禦ぐ^{あせ} 所以の方を求めず。癸丑墨夷^{きちゅうぼくい}の事（1853年、ペリーの浦賀来航）あるに及び、然る後、祖宗の故事を知り、以て当時を済^{すく}うこと無し。而して変通更革の以て已むべからざるなり。是に於て一旦令を發して、水陸の兵制、堡台（台場）の備へ、皇砲（大砲）巨艦、以て凡百の器械の細に至るまで、皆則を荷蘭^{オランダ}に取る。

既にして其の人を招致し、舟楫（船と舵）を操り、水兵を練るの法を受く。又武学を置き、蕃書院を建て、之が教師を設けて以て多士を育す。凡そ彼の諸学科は、皆其の力の及ぶ所に随いて、之を治むるを得たり。蓋し其の意は全く彼の長ずる所を取りて、我が短なる所を補い、以て我が勢を振うに在り。而して一毫も固執の私を其の間に雑えざるなり。宜しく其の兵制は整い、堡台は嚴に、砲舶は悉く具はり、器械尽く利に、既に以て虜の侮を禦ぐに足れり。而して人材日に長じ、国は駸々乎として疆（強）に趨かん。然れども其の効未だ顕れず。虜、其の是の如きを見るや、滋以て驕肆す。我は唯々惴々焉として一物の其の欲に適はずして、或いは其の怒りを激せんことを懼るのみ。此れ其の故は何ぞや。（69）

日本の幕府は、ペリー来航以来、「彼の長ずる所を取りて我が短き所を補ひ、以て我が勢を振ふ（70）」という採長補短を内実とする西洋化を進め、オランダをモデルとして軍事や教育などの諸分野で積極的に欧化政策を推進してきた。しかし、中々、実効があがらない。問題の根本は、学政が不一致で、人材の育成と登用とが全く整わず、身分制度の下で家学、家職が世襲され、門閥制度が蔓延している故と彼は批判し、学政不一致の悪しき状況を次のように指摘する。

学政は一に諸を儒臣に付して、復意を措かず。而して其の他文武の学、礼はこれを礼家に付し、楽はこれを楽家に付し、兵はこれを兵家に付し、射・御・書・数・刀・鎗・医方、凡百の学に至るまで、亦皆これを射家・御家・書家・数家の類に付す。人々のこれを為すに任す。故に学者は各々私見を張り、其の要を求むるを知らず。是を以て天下の学、固より則ち虚にして、其の用に適するもの、蓋し幾ど無し。然り而して、官を授け職に任ずる、又唯々閥閥（門閥）資序（順序）を以てするのみにて、学と材とは則ち問はず。故に治道に達せずして、執政に任ずるものこれあり。食貨を習わずして司農たる者これあり。兵を知らずして三衛（軍隊）を管するものこれあり。律を学ばずして理官（裁判官）となるものこれあり。工を曉らずして大匠となるものこれあり。この類を推すや、指僂するに勝へず。学の明らかならざる、人材の振はざる、文武百官の其の人を得ざる、豈此れより甚だしきものあらんや。（71）

国家民族の危機に際して、如何に武備を整え人材育成の教育機関を設けても、学政一致

を根本とした人材の育成と登用の制度が確立されなければ、本末転倒の改革である、ということである。幕府の改革政策に対して厳しい分析を加えた虎三郎は、欧米列強諸国に関しても、当時の攘夷思想に幻惑されることなく、実にリアルな認識を示していた。

東西諸藩（欧米諸国）は其の道^{せんろう}浅陋、其の俗^{ひんび}貧鄙、遠く中国（日本国）の美に及はずと雖も、然も其の發明する所の諸学に至りては、則ち幽微を探り、精緻を窮め、家国民生を裨益すること、中国（日本国）の未だ嘗てあらざる所なり。而も其の学を設け材を育し、職を分ち課を考ふること、又詳かにして且^{つく}悉さざることなし。是を以て、これを内にしては、政事を修め、財用を^{おさ}理め、百工を課す。外にしては、外国と交はり貿易を通じ、師旅（軍隊）を出して、廢事あることなし。国以て富み、兵以て強く、四海に横行して、能く禁ずる者なし。⁽⁷²⁾

上記の虎三郎の叙述には、産業革命を達成し富国強兵を実現した欧米諸国の、経済覇権の拡張をめざして、強力な軍事力を背景に世界進出を展開している姿と、閉鎖的な世界観に安住し拘泥している旧態依然の日本とが対比的に描写されている。実は、そのような欧米諸国の素顔と日本の現実とが重なりあって、ペリー来航以来の危機的な状況、すなわち「彼其の自ら視ること^{はなは} ^{おご}太だ驕り、中国（日本国）の己^{おのれ}に若かざるを見るや、以て是を愚なるべしと為す。乃ち陸続として至り、不遜の語を出し、^{ちようりよう}跳梁の態を示す。而して中国は^{いかん} ^な奈何ともする莫し。⁽⁷³⁾」という日本の悲劇的な状況、押し寄せる欧米諸国の前に為す術のない無為無力な国家としての徳川幕藩体制の日本、主体性を喪失して次々と欧米諸国に蹂躪され追隨するという日本の状況が惹起された、と虎三郎は分析している。

このような欧米列強と日本の現状に関する虎三郎の分析や理解の仕方は、恩師である象山自身が、ペリー来航に10数年も先立って惹起されたアヘン戦争以来、主張し続けた持論であり、「東洋道徳・西洋芸術」思想が成立する前提となった世界観であった。

恩師象山と同様の視点に立つ虎三郎は、ペリー来航後の日本の現状を憂い、改革の方途を示そうとしたわけである。彼が問題の根本とみたのは、「今、中国（日本国）人材の振はず、文武百官の其の人を得ざるを以て、城内の政すら猶且つ挙げんと欲して能はざる所あり。⁽⁷⁴⁾」と指摘するごとく、国家民族の難局に対処できる有能な人材の絶対的な不足であった。それ故に日本の改革に当たっては、「一旦悉く彼の学を収め、以て国勢を振わんと欲するも、そのなす所のものなし。亦^{まどい}惑なきのみ。⁽⁷⁵⁾」と、この期に及んでは西

洋の学問を全面的に受容して国勢を挽回するしかない、と彼は提言する。

日本は、長い徳川幕府支配の下で生きた学問が不振を極め、国家富強という現実課題に対応できない学問状況にある。その結果、「文武百官、率ね皆な学ばず。其の職皆な虚を為す。夫れ当今の患此の如し。⁽⁷⁶⁾」という、各分野で責任ある職務についている者が不学の故に、現実問題の解決能力を失っている、と彼は分析するわけである。無用な「虚学」から有用な「実学」へと学問の転換をはかるには、「教養を広くし以って人材を育するに在り。官制を修めて任使を専らにするのみ。⁽⁷⁷⁾」と説き、学問を研鑽した教養のある人材の育成と登用の制度を実現しなければならない、と主張する。そして彼は、教養豊かな人材を育成するには、大学から小学に至るまでの体系的な学校教育制度の確立が不可欠であること、すなわち「興学」の必要性を強調するわけである。

だが、そこに彼のいう「興学」とは、従来の東洋的世界観の下での狭い枠組に収まった旧態依然とした学問の復興ではなく、東西両洋の学問を視野に入れた新たな世界観の中で現実問題に対応できる有用の学問、すなわち「明体達用」の学問を興す、という意味である。その場合、学問には大きく分けて二つあるという。「何を以てか教養を広くし人材を育すると謂ふか。夫れ学の事は二つあり。道なり、芸なり。道は以て体を明らかにし、芸は以て用を達す。相離るべからざるなり。⁽⁷⁸⁾」と。すなわち学問には、人間の本体である「道」に関する道徳と、その本体を表現して物事をなす「芸」に関する科学技術とがあり、しかも両者は人間において統一融合され、決して別々に分離独立してあるものではない。そうした東西の学問を統合した「明体達用」の学問を身につけた人間、すなわち「東洋道徳」と「西洋芸術」を兼備した人間こそが、今後の日本に望まれる「人材」と呼ばれるに値する国家有意の人間である、というわけである。

そして、「興学」の具体的な実現は、一重に教育の如何に係っていると考える彼は、教育、特に学校教育の在り方を重視し、そこに西洋に倣った全国規模での統一的な教育制度の確立を提唱する。すでに日本の江戸には、指導者養成の専門別の高等教育機関として三つの学校（幕藩体制の官僚養成機関としての昌平坂学問所、軍事的な人材養成機関としての講武所、洋学の研究教育機関としての蕃書調所）があったが、それらは個々バラバラで相互の連関もなく、所期の機能を発揮できない状態にある、とみた。

これらを改革するには、まずは三学を統一し、欧米諸国の学校制度を範として学科組織や教育内容を整備拡充すること、学校に必要な図書や器械などを西洋から購入すること、生徒を海外に派遣する留学制度や外国から教師を招聘する御雇外国人教師の制度を早急に

創設すること、等々の改革が不可欠であることを、彼は次のよう提唱している。

今、都府の学三つ。曰く大学、曰く武学、曰く蕃書院。大学は主に道を教うる所、而して武学と蕃書院とは、則ち芸のみ。然り而して三者は相為に謀らず。胡越のごとく然り。此れ固より已に失せり。而して況んや三者は皆未だ其の宜しきを得ず。前に言う所の如きか。今修めて之を挙げんと欲せば、三者これを一所に集め、皆其の堂廡^{どうぶ}（学校建物）、屋舎、垣^{えん}牆^{しょう}（垣根）の制を拡大すべし。大学に在りては、則ち教師を増し而して選を厳にし、国史制度律令格式の学、国家礼学兵刑食貨の籍（書籍）、皆これを此^こに属し、之を古法に考へ、之を時勢に斟^くみ、以て科を設け局を分つ。要は華を去りて実を得るにあり。夫れ武学と蕃書院との若きは、其の教うる所の芸、率ねこれを彼にとる。則ち其の科を設け局を分つは、固より亦宜しく倣うべきなり。而して教導の人に乏しければ、則ち生徒を遣わして彼に学ばしむると、教師を彼に雇うとは、又皆速に行ぜざるべからず。遣わす所の生徒は拾歳以上、四拾以下、俊爽彊敏^{しゅんそうきやうびん}なる者を択び、五人を保となす。保に長あり。総長を立て、其の勤惰を督す。雇う所の教師は、毎科数人、各局に分居す。諸学科用うる所の図書器械は、又皆これを彼に購ひて各局に配置す。悉く備はらざるなし。⁽⁷⁹⁾

幕府の学制を抜本的に改革すべしとする斬新な学校構想であった。しかしながら、学制改革で最も重要なことは、基礎教育を担う小学校をベースとして高等教育までが機能的に組織化された学校制度の確立にある故、先ず以て国民全体を就学対象とした小学校制度を確立することが肝要であると説き、彼は次のように述べている。

然れども猶宜しく挙ぐべき者あり。小学是なり。夫れ長じて学ぶと、若小にして之を習ふと、入り易きは孰^{いず}れぞや。故に先王は殊に小学の教えを重んず。而して近ごろ外蕃の幼蒙を導くの法を聞くに、又其の詳を極む。今都府に於いては小学数所を建て、士大夫の子弟、年七、八歳に至れば、皆これを此に入れ、而して教うるに六書（六経一詩経、書経、易経、春秋、礼記、楽記）の学、四子（孔子、孟子、曾子、子思）六経の文を以てし、兼ねて外蕃の幼蒙を導く所以の者を以てす。其の長ずるに及んで、之を三学に進む。則ち教を受くるに地あり。而して材は以て達すべし。夫れ是くの如し。然る後、都府の学備わる。⁽⁸⁰⁾

虎三郎の抱く小学案には、士庶の身分を問わず、すべての子弟を入学させるべきであるという、国民皆学の思想が示されていた。そのような彼の学校教育構想の前提には、近世の身分制社会では世襲性による固定的な人事が、人材の育成と登用とを阻んでいるとの批判的な認識があった。それ故に彼は、身分的な教育差別の旧弊を打破して、能力主義による人材の育成と登用の制度が、今こそ国家的規模で確立される必要がある、と主張したのである。人材育成を基礎とした富国強兵の実現、これこそが虎三郎の教育立国思想の根本であった。

以上のような虎三郎の処女論文「興学私議」は、安政6年（1859）の春に書き上げられた。恩師象山と別れてから4年後のことである。くしくもその年は、同じ象山門下の橋本左内や吉田松陰が処刑された安政大獄の年でもあった。「興学私議」に示された内容は、恩師象山が私塾で展開した教育そのものであり、それは象山の描いた「東洋道德・西洋芸術」という教育的思想世界の範疇の内であった。したがって虎三郎の学校教育構想は、象山の学校教育論を具体化した内容であったとみてよい⁽⁸¹⁾。幕末期の注目すべき学校論としては、虎三郎の「興学私議」の数年後に書かれた、南部藩の大島高任（1826-1901）が構想した学校教育論が傑作とされる。だが、虎三郎のそれは、大島のそれと比較しても、全く遜色のない出来栄であった⁽⁸²⁾。従来の教育史学界では、ほとんど注目されることのなかった虎三郎の「興学私議」に示された学校教育構想は、幕末期における近代的な学校制度論の先駆として注目に値する内容であると評してもよいであろう。

ところで、虎三郎の「興学私議」は、無念にも江戸遊学の途上で帰藩しなければならなかった虎三郎が、その後の越後長岡での謹慎生活の日々に刻苦勉励した学問の成果を、信州松代に蟄居中の恩師象山に報告したいという一心で執筆した論攷であった。「興学私議」を受け取った象山は、松蔭の届けた「幽囚録」の場合と同じように、これを喜び、その出来栄を賞して次のような讃辞を送った。

象山先生曰く、小林子文^{しげん}は、嘗て余に従ひて遊ぶ。志は明体達用の学^{しべつ}に有り。辞別して数歳、録して此の文（「興学私議」）を示す。詞理明暢^{めいちょう}にして、皆実用有り。平静の志^{そむ}に負かずと謂うべし。⁽⁸³⁾

(三) 「興学私議」の実践による戊辰戦後の長岡復興

(1) 虎三郎の謹慎生活と維新前後の長岡藩

江戸の象山塾に学んだ門人たちは、象山が捕縛された後、それぞれ郷里に帰藩し、象山塾での学習成果を活かして様々な分野での活動を展開する。地方に帰った多くの門人たちに共通する顕著な活動の一つとしては、江戸での洋学に関する学習成果をもって地域近代化のリーダーとして活躍したことである。まず第一に、幕末維新时期という新旧文明が転換する時代的な要請として、当然のことながら西洋砲術や西洋兵学など、国防に関わる蘭書の翻訳とその指導普及という先駆的活動があげられる。例えば、信州上田藩における八木剛助(1801-1872)や山田貫兵衛(1813-1872)、越前大野藩における広田憲寛(1818-1888)や内山隆左(1812-1864)、但馬出石藩における大島万兵衛(1806-1888)などの場合がそうであった⁽⁸⁴⁾。彼らは、象山塾での学習成果と帰藩後の翻訳活動などによって、広め深められた西洋日新の知識技術に関する研究成果を展開し、幕末維新时期に藩の砲術や兵学の近代化、すなわち西洋化を推し進める兵制改革の推進者となって活躍した人物である。彼らの軍事科学を媒介とした洋学普及の活動は、江戸から明治への時代展開の中で、従来の和漢流から新たな西洋流へと文明が転換する時期にみられる典型的な過渡的現象であった。

不本意ながら、志し半ばで長岡に謹慎の身となった虎三郎の場合もまた、同様であった。安政元年の春以来、彼は「求志洞」と名づけた自宅に籠り、病身に鞭打って学究の日々に明け暮れた。その間の彼は、論文「興学私議」などの著述活動の他に、西洋兵学を中心とする蘭書の翻訳活動をも根気強く進めていた。江戸の象山塾時代に蒐集したオランダ原書『重学訓蒙』『察地小言』『野戦要務通則一斑』^{いっばん}『泰西兵餉一斑』^{へいしやういっばん}などの翻訳が、その成果であった⁽⁸⁵⁾。しかも彼は、謹慎中においても自ら執筆した論攷や翻訳草稿などを、訪問してくる同藩の有志や子弟に示して彼らの意識の変革や世界観の拡大を促し、また長岡藩の兵制改革についても指導していた⁽⁸⁶⁾。明治の夜明を眼前にした慶応年間の初め、長岡藩は、兵制改革の実行に際して、虎三郎など藩の有識者たちに改革意見を求めた⁽⁸⁷⁾。この求めに応じて虎三郎は、藩老に意見書を提出した⁽⁸⁸⁾。彼の意見書は、西洋兵制に関する確かな知識を基に論述されており、いわば西洋先進国をモデルとした長岡藩兵制の近

代化論であった。特に彼は、兵士養成の在り方を喫緊の問題として重視し、西洋先進諸国における士官教育のための学科目（地理、本国史、万国史、数学、代数学などの21科目）を例示しつつ、具体的な改革案を提示している⁽⁸⁹⁾。

なお、この意見書の末尾には、「拙訳兵書草稿三冊を貴覧に入れ奉り候、之は一兩年中病間に蘭兵書中より抄録仕置候ものにて、軍務切要の事件と存候⁽⁹⁰⁾」と、虎三郎自身が抄訳した西洋軍事科学に関する蘭書3冊の翻訳草稿を意見書に添付する旨の一文が付記されていた。その「三冊」とは、先に紹介した『察地小言』『野戦要務通則』『泰西兵餉一斑)』を指すものと思われる。

ところで、長岡藩にとっての明治の夜明けは、惨憺たる悲劇の幕開けであった。慶応3年(1867)12月に発せられた王政復古の大号令、その翌年の慶応4年、すなわち明治元年は、薩長両藩が主導する官軍側と旧幕府軍側との雌雄を決する「鳥羽伏見の戦い」で幕が開けた。いわゆる戊辰戦争の始まりである。この戦争は、長岡藩の運命を大きく左右する出来事となった。幕末維新时期の長岡藩にあって指導的立場に立ちうる人物は、河井継之助、三島億二郎、そして虎三郎の3名であり、彼らはいずれも象山門人であった。だが、等しく象山門人とはいっても、河井と三島や虎三郎とでは、少々事情が異なっていた。思想的に、したがって帰藩後の進路と行動において、単に食客として象山塾を通り過ぎただけの河井に対して、億二郎と虎三郎の場合は、終生、象山を恩師と仰いで敬慕し、象山の提唱した「東洋道徳・西洋芸術」という思想的世界を誠実に生き抜いた人物であった。億二郎と虎三郎が、共に江戸の象山塾時代の罪科をもって不遇な謹慎生活を送らなければならなかった幕末期に、河井は並外れた経世済民の才覚を発揮し、立身出世の階梯を駆け上った。そして彼は、元治元年(1864)には、上席家老に抜擢され、名実共に長岡藩政の中心に踊りでた。思想や行動において、虎三郎や億二郎と、河井との相容れない関係を、虎三郎の遺稿集を編纂した外甥の小金井権三郎は、次のように論述している。

長岡藩中、翁と名声を馳せる者は、鵜殿団次郎・河井継之助・川島億二郎等。鵜殿は幕下(幕府)に徴されて目付役と為り、勝安房等と共に幕議に与る。故を以て常に藩に在らず。河井、川島、翁と共に藩政を議し、迭に其の論を上下す。然るに翁、多く病床に在るを以て、持論を施行すること能はず。川島も亦、翁と意を同じうす。独り河井のみ之に反す。且つ才弁(弁舌)以て衆を服し、遂に頭職に昇り、藩政を掌握す。官軍越に臨むに方り、藩師方針を誤る者は、皆河井の意に出ず。多く壯士を亡

くし、其の身も亦戦没す。慨せざるべけんや。是の時に方り、翁、屢々河井の失政を論ず。然れども病に臥して其の説を達する能はず。徒に天を仰いで浩嘆するのみ。蓋して河井の藩政を執るや、権力一時盛んなりと雖も、学力道徳に至りては、翁に遠く及ばず。故を以て平素、翁を忌避して其の説を用ひず。翁も亦其の論の容れらざるを知り、敢えて藩政に与らず。王政復古の日に至るまで、唯々病を養って一室に閉居するのみ。⁽⁹¹⁾

戊辰戦争の勃発と共に、歴代藩主が老中職を務め幕閣の一翼を担ってきた徳川譜代の長岡藩は、その帰趨が注目された。上席家老から新たに軍事総督に就任した河井の下で、藩論を佐幕（幕府側）で統一し、危機的事態への対応をはかろうとした。そのような状況の中で、億二郎と虎三郎は、終始、河井と意見を異にし、一貫して非戦論を主張した。だが、会津討伐をめざして越後長岡に進軍した新政府軍に対して、武装中立をもって平和的收拾をはかろうとした河井の戦略は頓挫し、ついに官軍と武力衝突した。結果は悲惨な無条件降伏。長岡領内は、焼け野が原と化してしまった⁽⁹²⁾。

（2）学校建設による戊辰戦後の長岡復興—美談「米百俵」の誕生

戊辰戦争の結果、長岡は幸いにも藩の取り潰しだけは免れたものの、藩の領地は従前の3分の1、7万4千石から2万4千石に大幅減封されて存続を許された。しかし、焼土と化した戊辰戦後の藩士家族の生活は、「住むに家なく、食するに米塩もなかった⁽⁹³⁾」と記されるほどに、衣食住に困窮を極めた。虎三郎自身が、当時の悲惨な生活状況を「本藩極々困迫を極め、士族の内にも粥を三度づつもすすりかね候者も有之候⁽⁹⁴⁾」と記しているごとく、惨憺たる窮状に陥っていたのである。大幅減封による財政窮乏の中で焦土と化した郷土長岡の復興は、部外者の想像を絶する難題であった。そうした苛酷な戦後状況の下で、長岡の再生を託された人物が、外ならぬ虎三郎と億二郎であった。黒船の来航以来、河井とは対照的に、10年を超える長い不遇な生活から解き放たれた二人は、幸か不幸か、戊辰戦争の後、請われて藩政の表舞台に登場することとなる。

維新政府から隠居謹慎を命じられた第12代藩主牧野忠訓^{ただくに}（1844-1875）の後を受けて、明治元年12月、新たに牧野忠毅^{ただかつ}（第11代藩主忠恭の第4子、1859-1917）が第13代

藩主を襲封した。いまだ10歳を過ぎたばかりの幼君であった。彼は、明治2年4月、維新政府に版籍奉還を願い出て藩知事（知藩事）となるや、直ちに新生長岡藩の藩政を担うべき執政として、牧野頼母（図書、1826-不詳）、三島億二郎、そして小林虎三郎を取り立て、同年8月、最初の職制改革を実施した⁽⁹⁵⁾。この新たな藩政のスタート時において虎三郎は、人材を育成し文武を振起する「文武局」の総督に任ぜられた。さらに、同年11月の第2次職制改革では、虎三郎と億二郎の二人は、牧野頼母と共に藩の大参事（旧家老職）に選挙され、長岡復興に挺身することとなる⁽⁹⁶⁾。肝胆相照らす仲であった象山門下の二人は、郷土長岡の再生を期して東奔西走する。だが、病身の虎三郎に代わって、戦後長岡の救済方を嘆願すべく長岡と東京を往復して関係各方面に奔走したのは、年長の億二郎であった⁽⁹⁷⁾。もちろん虎三郎の方も、長岡復興のための具体的な自力更生策を、億二郎と共に立案し実施に移していった。

復興策の中でも、特に注目すべきは、新たな藩立学校の創設であった。虎三郎は、幕末期の安政年間に、国家の富強治安の根本は人材育成にあるとの教育立国主義をもって「興学私議」を著していたが、戊辰戦後の長岡復興に際しても彼は、学校建設による人材の育成こそが、全ての復興政策の基礎であると考え、廃墟と窮乏の直中で藩立学校の新設計画を打ち出したのである。

早くも虎三郎は、職制改革が実施される前の明治2年5月、億二郎とはかつて城下の寺院（四郎丸村昌福寺）の本堂を借り受け、藩士教育を再開していた。これを、翌年6月には校舎を新築して移転し、校名も正式に「国漢学校」と名づけて開校式をあげるに至った⁽⁹⁸⁾。この学校は、従前の藩校崇徳館の再興ではなかった。教育内容は、儒学一辺倒であった藩校教育に対して、校名に表明されているごとく、国学を加えて儒学との兼学を必須とし、入学対象も身分制限を撤廃して平民子弟にまで門戸を開放した。まさに藩立国漢学校は、長岡藩における新たな学校の誕生であった。

この学校を建設するには資金面で難渋した。実は、学校の開設資金に組み込まれたのが、藩知事となった旧藩主家からの下賜金百両と支藩である三根山藩から送られた救援米「米百俵」であった。その日の飢えを凌ぐにも事欠くほどに厳しい食糧事情の中で、明日への命脈を保つ貴重な救援米を学校開設の費用に充当することには、無論、反対意見もあった。だが虎三郎は、維新政府の教育政策をにらみながら、それに応える形で「興学私議」に描いた教育立国思想を貫き通し、救援米「米百俵」の代金を学校開設資金の中に組み込んでしまった。この学校開設に至る経緯を美談として感動的に描いた作品が、山本有三の戯曲

『米百俵』（1943年）であった。

この国漢学校は、さらに開校直後の同年8月には、国学と漢学の外に医学局と洋学局、それに演武場が増設され、国漢洋の三学を講ずる総合学園となった。新生なった藩立国漢学校の初代校長には虎三郎が就任し、和漢洋の学問を教育内容とする明体達用、文武両道の教育が実施されたのである。まさに虎三郎が「興学私議」に描いた学校教育構想の具体化であった。開校の趣旨を周知徹底すべく藩当局より布達された次の文書は、虎三郎の執筆と思われるが、そこには彼の教育立国思想による郷土復興への悲壮な決意が滲み出ている。

目今藩計極々窮^{きゆうしよ}処には候へ共、文武の義は一日休業候へば後來藩勢振興一日の遅延を引起し候次第、従五位様（旧長岡藩第十三代藩主の牧野忠毅^{ただかつ}）に於ても、此段深く御憂慮被為在候より、御新禄の内より御出費にて国漢学校建設に相成り来る十五日開校に候條、銘々にも御旨趣辱く相弁へ、艱難中ながら精々出校、奮発勉強、着実研修、其材質を尽し、御奉公の基礎相立候心掛可為肝要者也。⁽⁹⁹⁾

旧教育の藩校崇徳館と新生なった国漢学校の両方に学び、やがて維新政府の重要課題であった憲法制定に関わり、伊藤博文首相の秘書官や行政裁判所評議員などを歴任した貴族院議員の渡辺廉吉^{わたなべれんきち}（1854-1925）は、開校当初の同校の様子を次のように回顧している。

国漢学校の教育は崇徳館とは大に内容を異にし国学と漢学とを併せ教授すると云ふ点に頗る進歩の跡が見える。従来、崇徳館の教育は、凡て漢学で唐土の事のみを教へてあったから、日本の臣民でありながら日本の国体等の事も分らなかったのであるが、国学を併せ教ゆるに至て従来の欠陥を補ふこととなった。而して単に国学と云ふも、仮名交りの文章を読ませるのでもなければ又和文和歌を教ゆるのでも無い、矢張り漢文を以て国家の歴史、制度等を学ぶと云ふ遣方^{やりかた}である。之と同時に世界の出来事^{あらか}、凡ゆる科学的の事をも研究させる。日本の歴史、制度の教授に用えた重なる教科書は大日本史、日本外史、漢学に於ては経書^{けいしよ}（儒教の經典）は勿論史類等にて、尚ほ科学的の方面に於ては漢文で書いた地球説約（地理書）、窮理書（物理書）、博物新篇、其他技術に関するもの等で、全く教育の方針を一変したものである。第一の学校長は病翁^{へいおう}小林虎三郎サンで、此人は従来学校へは一回も出られなかったが、初めて国漢学

校の校長に出られた。小林サンに次で田中春回^{たなかしゅんかい}サン、高野耕造サン等が重なる先生で、熱心に教授せられた。当時、私共は小林サンを神様の如く尊敬し、又田中、高野の両氏とは往々議論もしたが、此両氏は宛^{あたか}も日月の如く思ふていた。⁽¹⁰⁰⁾

だが、救援米「米百俵」をも組み込んで苦心惨憺の末に新設された国漢学校は、設立後、間もなく大きな転機を迎えることとなる。明治4年(1871)7月の廃藩置県によって長岡藩は消滅し、新たに柏崎県の一行政区域に組み込まれてしまったのである。したがって、藩立の国漢学校は当然のことながら柏崎県の所管となり、県立柏崎学校の長岡分校と改められた。この措置は、学校創設に苦心した虎三郎たち藩関係者にとっては、アイデンティティの基盤であった三河以来の長岡藩の終焉を実感させる衝撃的な出来事であったに違いない。

おわりに

廃藩置県の直後、虎三郎は、藩の一切の公職を辞して郷土長岡を去り、東京へと向かう。理由は、持病の悪化であった。たしかに表向きの理由は病氣療養のためであったが、いまだ廃墟長岡の復興事業が緒に着いたばかりの重要なときに、彼は、何故に郷里を去ろうとしたのか。その動機とその後の新たな人生への展望とは、いったい如何なるものであったのか。彼の心中を理解するのは容易でない。もちろん、その解釈は多様である。しかしながら、戊辰戦争による廃墟と貧窮の中から立ち上がり、畏友の億二郎と共に、郷土復興をめざして悪戦苦闘の日々を送った2年余りの歳月。その基礎がようやく確かなものとなってみえてきたその時に、彼は、後事の一切を畏友の億二郎に託して、自らの人生に区切りをつけた。このことは疑いえない事実である。

かつて、虎三郎の恩師である象山は、愛弟子・松蔭の海外密航事件に連坐して捕縛されたとき、江戸伝馬町の牢獄で半生を省み、自身の学問的な世界観の拡大過程と人生の展開とを重ね合わせて、「予年二十以後、乃ち匹夫の一國に繋ること有るを知る。三十以後、乃ち天下に繋ること有るを知る。四十以後、乃ち五世界に繋ること有るを知る。⁽¹⁰¹⁾」と、漢詩に吐露した。愛弟子である虎三郎にとってもまた、安政元年に罪をえて郷里長岡

に退いてからの10有余年の間、特に戊辰戦後の長岡復興に腐心した数年間は、まさに「匹夫の一國に繫ること有るを知る」という人生の展開であったといえる。したがって、難病と対峙する自らを「病翁」と改名して、郷里を去り行く40代半ばの虎三郎の胸中には、江戸遊学のときに描いた青年の夢—「天下に繫ること」あるいは「五世界に繫ること」をめざした学問思想の探求—を何等かの形で実現させたいという、最後に残された微かな希望がなかったわけではない。それは、上京後の晩年に病状が悪化する中で展開された彼の国家的レヴェルでの諸活動—歴史教科書『小学国史』（全12巻、1873-1874）の編集刊行、漢書『德国学校論略』（上下2冊、1874）の翻刻紹介、さらには英米翻訳教育書（米国原書の『学室要論』と『教師必読』、英国原書の『童女筌』、1875）の校訂活動などは、まさに古今東西に亘る和漢洋の学問を修得した虎三郎にして初めてなしうる、最も具体的な成果に結実して示されたとみてよい。

以上のような虎三郎の教育立国思想による郷土復興への努力、すなわち「米百俵」の教育的思想世界は、単に越後長岡という一地方で誕生し完結する教育的美談では決してなかった。それは、教育立国思想による人材育成こそが、国家富強の最も基礎であるという、彼が若くして「興学私議」に描いた夢の具体的実践の一つであった。そしてまた、その夢が、郷里長岡を去った後に、彼が病軀にめげずに挑んだ日本の近代化推進への教育的な諸活動を成し遂げる強靱な意志を、彼に喚起し持続させたとみてもよいであろう。そう捉えるとき、彼がめざし求めた学びの成果は、処女論文「興学私議」に示された教育立国思想の具体的な実現に向かって展開された様々な活動に示された。そのような、彼が求め抜いた教育的思想世界は、恩師象山が提唱し実践した思想「東洋道徳・西洋芸術」を継承し具体化するものであったとみてよい。虎三郎は、数多の著名な象山門人たちの中であって、象山の学問思想を最も誠実に継承し実践した門人であった。日本近代化に関わって生きた彼の教育的な軌跡は、幕末維新时期における日本近代化の思想としての「東洋道徳・西洋芸術」の可能性や有効性を、新生日本の幕開けのときに、具体的な実践活動として描かれたものであった、と理解することができる。

【 注 】

(1) 象山が生涯を賭して探究し実践した学問思想は、「東洋道德、西洋芸術」という象徴的な言辭に集約される。尊皇攘夷が叫ばれる幕末期にあつて、東西両洋の学問文化は、矛盾し対立する関係で捉えられていた。だが、人間界も自然界も、万物を貫く宇宙の真理の一元的な普遍性に対する学問的信念に立脚する彼は、「宇宙間に実理二無し」と喝破して、東西両洋の学問を止揚し統一した、日本人の向かうべき新たな学問の構築をめざした。すなわち「漢土聖賢の道德仁義の教を以て是が経とし、西洋芸術諸科の学を以て是が緯」とする「東洋道德・西洋芸術」という新たな学問観、思想観である。彼は、「東洋道德」と「西洋芸術」との連関を、「泰西の学は芸術なり、孔子の教は道德なり。道德は譬えば則ち食なり、芸術は譬えば則ち菜肉なり。菜肉は以て食気を助くべし。孰れか菜肉を以てその味を損ふべしといふか。」（安政四年春「孔子夫の画像に題す」）と表現した。人間の存在に不可欠な食事を構成する「食（東洋道德）」と「菜肉（西洋芸術）」とは、偏りの無い相互補完的な関係にあるという表現は、誠に要をえた比喩の説明である。

象山は、日本人の主体性を如何に担保するかという幕末期日本のおかれた現実的視座から東洋と西洋とを相対化し、現実的な実理有用性という根本原理から東西両洋の学術文化を統合した、日本の新しい学問観を構想しようとしたのである。人間存在の意味や価値に関わる「道德」の理解や実践において、東洋社会は西洋社会に決して劣るものではない。いな、アヘン戦争に看取される西洋社会の弱肉強食を原理とする植民地獲得の姿は、倫理道德なき悪魔の所業である、と象山は西洋列強の本質を喝破した。だが彼は、西洋を全否定したわけではない。西洋列強の世界進出を可能ならしめている強大な軍事科学を生み出している「西洋芸術」、すなわち科学技術とそれを支えている数理科学を基本とする精緻な学問、この絶対的な優位性を冷静に認識し、これを積極的に受容しなければ、日本という国家民族の明日はない。そう、象山は考えたのである。

だが、明治以降、西周（1829—1897、明治期の官僚派啓蒙思想家）をはじめとする多くの洋学者たちは、西洋流の学問的な概念や範疇を以て、象山思想「東洋道德・西洋芸術」の内在する論理的な不整合性を指摘し、人間界（心理）と自然界（物理）を貫く真理を分別しえない接ぎ木の思想、すなわち折衷思想であると批判してきた。しかしながら、象山が生きたのは、内外共に危機的状況に覆われた幕末動乱の時代であつた。そこでは、論理

的な整合性よりも問題解決できるか否かの現実的な有効性が求められたのである。後に家永三郎（1913－2002、東京教育大学名誉教授）は、欧米の外来文化を摂取する日本側の主体的条件を無視した近代化研究を批判をしたのは、至極当然のことであった（家永三郎『外来文化摂取史論』、初版は1946年、1974年に青史社から復刻）。象山研究を含めた日本の近代化研究は、欧米先進諸国の学問文化を受容する日本側の歴史的条件、すなわち主体性を捨象して、欧米側の近代化理論の尺度をもって測ろうとしてきた。今、改めて象山が提唱実践した「東洋道徳・西洋芸術」という思想の、日本近代化にはたした歴史的意義の再吟味が求められる所以である。（拙稿「日本近代化と佐久間象山－『東洋道徳・西洋芸術』思想の教育的展開－」（アジア文化研究学会『アジア文化フォーラム』第11号、2008年）を参照。）

(2) 円城寺清著、京口元吉校註『明治史資料 大隈伯昔日譚』（富山房百科文庫版、1924年）、30－31頁。

(3) 国家存亡の危機的状況の中で象山の警咳に接した青少年たちは、迷い悩める自己の存在を揺さぶられ、人生を左右するほどの強い感化を受けた。その具体的な事例として、門人ではないが、明治維新後の日本近代化過程で陸軍軍医総監や日本赤十字社社長などの国家的要職を歴任した石黒忠^{ただのり}憲（1845－1941）をあげることができる。彼は、幕末維新期の錚錚たる人物、例えば江川坦庵、佐藤一齋、三条実美、岩倉具視、西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通、勝海舟などと面識をもった、近代日本における西洋医学の先駆者であり重鎮であった。その彼が、幕末期に西洋嫌いの蒙昧な攘夷論者から覚醒して西洋医学の研鑽に向かう転機となったのは、象山との出会いであった。彼は、いまだ成人前の若き日に、信州松代に蟄居中の象山を訪ねて教えを請うた。この無名の青年に対して、象山は、己の獲得した西洋日新の学問文化を披瀝し、国事多難な日本の状況や外国の事情、経済問題や兵制改革など、幕末期日本が直面する様々な難題について個人教授した。それは、たった三日間のことであった。だが、石黒が象山から受けた衝撃は、彼の人生観が逆転するほどに大きかったのである。象山が存命中に入門できなかった石黒は、平田篤胤（1776－1843）が本居宣長（1730－1801）に対して「死後の門人」と称した先例に倣い、「われまた先生に対して死後の門人たらんことを願う」（石黒忠憲『懐旧九十年』東京博文館、1936年。引用は岩波文庫版、115頁）とまで述べている。晩年の石黒は、幕末維新期に己が邂逅した偉人と称せられる人々を回顧し、改めて象山という人物の教育的な感化力の偉大さを再認識して、次のように述べている。

「私の見た限りにおいて、その見識の雄大さ明達にして、一言一句私の脳中に沁み入
んで永く忘れることの出来ないのは、佐久間先生であります。吉田松蔭でも、橋本左
内でも、象山先生によって大なる感化を受けたことと思います。」

(同上『懐旧九十年』、113頁)

- (4) 拙稿「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者」(日本歴史学会編『日本
歴史』第506号、1990年7月)を参照。象山塾門人を窺い知る重要な門人帳資料として「訂
正及門録」(信濃教育会編『増訂象山全集』第5巻に収録)がある。だが、同資料には問
題点が多い。象山塾門人帳資料としての同資料の明治以降における理解と使用のされ方
を中心とした象山研究史上の問題点については、拙稿「象山研究史上の問題点(上)
(下)」(信濃教育会編『信濃教育』第1229、1230の各号)を参照されたい。
- (5) 拙稿「象山における儒学理解への前提と特質—幕末期における儒学的洋学受容論成立
への主体形成—」(筑波大学教育学研究集録』第2集、1979年)、同じく前掲の拙稿「日本
近代化と佐久間象山—『東洋道德・西洋芸術』思想の教育的展開—」を参照。
- (6) 象山門人たちが幕末維新期に描いた人生の軌跡は実に様々であった。倒幕運動に挺身
した人物としては吉田松蔭(1830—1859)や坂本龍馬(1835—1867)、宮部鼎蔵(1820
—1864)などがおり、また橋本左内(1834—1859)は明治維新前の安政大獄(1859年)
で処刑された。主として洋学についての学力をかわれ、幕府や維新政府に登用されて中
央で活躍した人物としては、市川兼官(兼恭、1818—1899。広島藩出身、幕府開成所教授、
東京学士院会員)、武田斐三郎(成章^{なりあき}、1827—1880。伊予大州藩出身、幕府開成所教授、
維新後は陸軍大佐兼兵学大教授)、木村軍太郎(1827—1862。佐倉藩出身、幕府の天文台
訳員や蕃書調所教授手伝などを歴任)、村上代三郎(大三郎、1823—1882。姫路藩出身、
幕府の講武所師範)、高島五郎(1825—1884。徳島藩出身、幕府の蕃書調所教授手伝、維
新後は元老院議官)、子安鉄五郎(俊、1836—1898。大垣藩出身、幕府の蕃書調所教授手
伝)、勝麟太郎(海舟、1823—1899。旗本、幕府の講武所教授方砲術頭取や蕃書調所頭取、
海軍伝習生監督などを歴任、維新後は外務大丞、海軍大丞、兵部大丞、参議兼海軍卿など
明治政府の高官を歴任)、蟻川直方(賢之助、1832—1891。松代藩、幕府の講武所教授や
洋銃隊取調掛を歴任、維新後は兵部省権大丞)、加藤弘之(出石藻、幕府の蕃書調所教授
手伝、維新後は大学大丞、文部大丞、外務大丞などを歴任し帝国大学総長に就任、貴族院
議員)、津田真道(1829—1903。津山藩、幕府の蕃書調所教授手伝、維新後は新政府の司
法省に出仕。外務権大丞、元老院議官、初代衆議院副議長などを歴任)、西村茂樹(1828

—1902。佐倉藩、藩大参事、維新後は文部大丞、宮中顧問官家族女学校長などを歴任。民間にあつては日本弘道会前身の東京修身社を創設。貴族院議員）、大島貞薫（万兵衛、1806—1888。出石藩、東京兵学寮教授、兵学侍講）などがいた。

なお、前述の子安鉄五郎（俊、大垣藩）は、「明治三年子安峻柴田昌吉等の諸氏相謀り上海より活字及器械等を買ひ、横浜元弁天町に日就社を設立し、続いて英和辞書を刊行せり。これ本邦に於いて英和辞書を印刷したる始めなり」（『読売新聞の沿革』）と記されるがごとく、日本における英和辞書刊行の先駆者となり、さらに「読売新聞社」の前身となる新聞社を創設して日本の新聞界においても先駆者となった人物である（『内外新聞人列伝子安峻』、『新聞研究』20号、1952年を参照）。

さらに地味ではあるが、幕末維新时期に地方で活躍した人物としては、長岡藩出身の三島億二郎（藩大参事）を筆頭に、松前藩出身の下国殿母（1826—1893。藩大参事）、会津藩出身の山本覚馬（1828—1892。同志社の創設、京都府議会議長）、大垣藩出身の小原鉄心（仁兵衛、1817—1872。藩大参事、越前本保県知事）や佐竹五郎（1823—1868。藩の軍制改革に西洋兵制を導入して尽力）、松本藩出身の小松彰（1819—1888。維新後は岡山県判事、大学大丞、生野県知事、豊岡県令等を歴任。官職を下野した後は、東京株式取引所を創設して初代頭取に就任し、さらに両毛鉄道会社や東京米商会社を創設して取締役を兼務するなど民間で活躍）や岡無理弥（1819—1888。藩軍事奉行）、上田藩出身の八木剛助（1801—1872。藩の学問所教授、砲術師範、維新後は宮内少丞、権大書記官、大書記官などを歴任）や山田貫兵衛（1813—1872。藩に西洋兵制砲術を導入、維新後は政府の小参事及宣教師などを歴任）、紀州田辺藩出身の柏木兵衛（藩西洋砲術の先駆者）、越前大野藩の広田憲寛（1818—1888。藩校明倫館教授、維新後は小学校教員）や内山隆^{りゅうすけ}左（1812—1864。藩の富国強兵策を実施、蝦夷地総督として北海道開拓を担当）、長州藩出身の軍司覚之進（1829—1902。藩への西洋砲術導入の立役者）や白井小助（1826—1902。奇兵隊編成の参謀、明治元年には討幕軍参謀として北越に参戦）、高知藩出身の樋口真吉（1815—1870。土佐幡多郡郷土の出身で地元で家塾を開き多数の門人を育成。土佐西部勤王党首領、戊辰戦争時には政府軍の小監察・軍裁判役）など、全国名地で活躍した門人は枚挙に暇がない。

なお、象山の門人帳資料に記載はされていないが、地元信州には象山門人が数多く存在した。彼ら信州の象山門人たちの日本近代化に関わる中央、地方での活躍については、後日、別稿（仮題『日本近代化と信州の象山門人たちの軌跡』）にて紹介する予定であ

る。

- (7) 長岡藩において幕末維新期を代表する人物の典型は、何といても戊辰戦争時の長岡藩総督、河井継之助である。彼は、象山塾門人帳資料『訂正及門録』にその名が記されている人物であり、同じ長岡藩の小林虎三郎や三島億二郎と同様に、象山門人の一人といえる。だが、河井の思想と行動に与えた影響力からすれば、彼は、実質的には象山と交友のあった佐藤一斎門人の山田方谷（1805－1877、備中松山藩の儒者で藩政刷新に尽力）の門人とみる方が妥当である。経世済民の才に長けた河井に比べて、同じ象山塾の門人であった小林虎三郎や三島億二郎は極めて地味な存在で、著名な門人の多い象山塾にあっても隠れた存在であった。三島に関しては、昭和初期から地元研究者の努力によって、戦後長岡の復興と近代化に向けて彼が企画・推進した数々の復興事業が解明された。三島に関する研究成果の代表は、何と云っても今泉省三『三島億二郎伝』（覚張書店、1957年）である。他方、虎三郎の人と思想あるいは行動に関しては、彼が没してから10余年の後に、外甥に当たる小金井権三郎、良精の兄弟が遺稿集を編み、同じ象山門下の勝海舟「題詞」および畏友である北沢正誠「序」をもって『求志洞遺稿』と名付けられ、明治26年（1893）に刊行された。

その後、昭和5年（1930）に至って地元長岡で松下哲蔵『小林病翁伝』（越佐新報社）も刊行された。が、虎三郎についての本格的な資料分析や現地調査を経て、彼の全体像を初めて明らかにしたのは、作家の山本有三である。彼は、丹念な資料調査を踏まえて戯曲『米百俵』を執筆し、昭和18年（1943）に新潮社から出版した。この本は、単なる戯曲ではなく、山本有三の研究成果を示す詳細な「注」と論文「隠れたる先覚者小林虎三郎」、および長文の「そえがき」とが収録されていた。この有三の一連の業績によって、虎三郎は美談「米百俵」の主人公として、一躍、その存在が内外に知られるところとなった。なお、長岡市は、昭和50年（1975）に有三の作品『米百俵』に関係資料を付して『米百俵 小林虎三郎の思想』を復刻した。

- (8) 林子平「父兄訓」の全文は『日本教育文庫』（日本図書センター復刻版、1977年）の「訓戒篇上」に収載。引用文は同書675－676頁。

- (9) 外甥、小金井権三郎編「小林寒翠翁略伝」（前掲『求志洞遺稿』所収）には、「幼より厳父の庭訓を受け（自幼受厳父庭訓）」と記されている。

なお、『求志洞遺稿』所収の漢文史料の解説に関しては、虎三郎関係史料を初めとする地元長岡の漢学史料の解説に尽力された漢学者の小林安治（1895－1992、元新潟県立

長岡高校教諭)の労作『国訳・略注 小林虎三郎の求志洞遺稿』(長岡市史双書第34巻、1995年)の読み下し文を参照にした。以下も同様である。先学の学恩に深謝する次第である。

(10) 同上「小林寒翠翁略伝」には、虎三郎の父親である又兵衛に関して、次のように記されている。

「父は小林又兵衛と曰ふ。誠斎又は巖松と号す。禄百石を食む。騎馬の士なり。学を好んで該博。又詩文を善くす。人と為り英邁不群、衆の畏敬する所なり。天保年間、新潟奉行を勤む。偶々蒲原郡の村民暴挙に会ふ。又兵衛单身槍を掲げ、馬を馳せて到り、直に魁首を説諭し、遂に之を鎮撫す。衆皆其の胆力に驚く。後に世子の伝となり、江戸の邸に移る。居ること歳余。職を罷めて帰国す。」

なお、上記の原漢文は次の通りである。

「父曰小林又兵衛。号誠斎又巖松。食禄百石。為騎馬士。好学該博。又善詩文。為人英邁不群。衆所畏敬。天保年間。勤新潟奉行。偶々会蒲原郡村民暴挙。又兵衛单身提槍。馳馬而到。直説諭魁首。遂鎮撫之。衆皆其驚胆力。後に為世子之伝。移江戸邸。居歳余。罷職帰国。」

(11) 虎三郎の家族に関しては、今泉省三『長岡の歴史』第6巻(野島出版、1962年)、183-184頁を参照。

(12) 前掲「小林寒翠翁略伝」には、「幼より巖父の庭訓を受け、後、藩儒高野某に就いて学ぶ。又、山田某の教を受く。」(原漢文は「自幼受巖父庭訓。後就藩儒高野某学。又受山田某教」)と記述されている。

(13) 長岡藩儒の高野松陰(1811-1849)、名は正則、通称は虎太、松蔭は号。頭脳明晰につき藩より江戸遊学を命じられ、幕府儒官の佐藤一斎(林家学頭、幕府儒官で昌平黌教授、1772-1859)に入門し、5年間、学問修行。帰藩後は、藩校崇徳館の教授となり、虎三郎や三島億二郎、河井継之助など、幕末維新时期に活躍する長岡の人材を育成した。

また、同じく藩儒者の山田愛之助(1816-1896)は、名は錫、号は到处、通称は政尚、あるいは愛之助。高野松陰と共に藩選抜の江戸遊学生となり、古賀洞庵(幕府儒官で昌平黌教授、1788-1847)に儒学(朱子学)を、伊東玄朴(幕府の西洋医学所取締、1800-1871)に洋学(蘭学)を学んで帰藩。洋儒兼学の藩校教授として虎三郎や三島億二郎、河井継之助などを教えた。以上は、今泉省三『長岡の歴史』第6巻(野島出版、1922年)、『長岡歴史事典』(長岡市、2004年)その他を参照。

- (14) 前掲「小林寒翠翁略伝」（長岡市史双書第34巻『求志洞遺稿』、15頁）には、「刻励勉苦、^{ざんぜん} 嶄然として頭角^{あは}を見はす。衆みな常人を以て対せず。藩主命じて藩校崇徳館の助教と為す。館は長岡藩校なり。」（原漢文は「刻励勉苦。嶄然見頭角。衆僉不以常人对。時年十七八。藩主命為崇徳館助教。館長岡藩校也。」）とある。
- (15) 『長岡市史』の「資料編3」（1994年）、642頁。原漢文は「凡掌授初学句読。要義理分明音韻雅正。教育人才之本根。全在此職。」
- (16) 「十代忠雅が老中の要職について外交事務に参与した時、海外知識の必要を感じて有為の藩士を江戸、長崎に留学せしめ、儒学の外に洋学をも修めさせた。」（蒲原拓三『長岡藩史話』、169頁）。なお、牧野備前守忠雅の履歴、特に老中在任中の思想と行動については、同『長岡藩史話』（57－59頁）、および坂本辰之助『牧野家家史』（75－80頁）を参照。
- (17) 伊東玄朴が江戸に開いた医学系洋学塾「象先堂」の「門人姓名録」（伊東栄『伊東玄朴伝』所収、玄文社、1916年）には、長岡藩からの入門者として山田愛之助（弘化2年9月）を筆頭に、菅沼幾太郎（嘉永4年2月、後に象山塾へ入門）、内藤信斉（嘉永7年閏月）、桑原誠斎（安政2年3月）、風間海斉（元治元年8月）の5名を確認することができる。
- (18) 前掲『長岡藩史話』、195－196頁。
- (19) 緒方洪庵が大阪に開いた医学系洋学塾「適塾」の門人録「姓名録」（緒方富雄『緒方洪庵伝』所収、岩波書店、1963年）には、長岡藩からの入門者として小山良長（嘉永5年）、小林準碩（同）、小林誠卿、（嘉永6年）、吉見雲台（安政6年）、榑原鎌秀（文久4年）の5名を確認することができる。
- (20) 象山塾の門人帳資料『訂正及門録』の歴史資料としての妥当性に関して、筆者は、同資料が内在する種々の問題点について様々な角度から検討を加え、詳細に吟味した。その研究成果が前掲の拙稿「象山研究史上の問題点（上）（下）」であり、その内容分析からみた入門者の実態についての論考が、前掲の拙稿「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者」である。
- (21) 渡邊慶一「佐久間象山と越後」（信濃史学会『信濃』第21巻第1号に収載、1969年1月）では、資料的な根拠が全く示されずに、長岡藩における「象山の砲術の門人」として「小林虎三郎、河井継之助、道家良助、川島鋭次郎、生田彦次郎、稲垣与一、萩原柔進、菅原幾三郎」の8名を列挙している。だが、そこには明白な誤認ある。すなわち「道家良助」は長州藩士の「道家竜介」（1800－1869、300石、砲術掛や御旗奉行を歴任し奥番頭格の重臣）

で、象山塾の門人帳資料「証正及門録」の嘉永5年の項に、長州藩の軍司覚之進と同時に入門したことが記されている。道家については、同郷同門の吉田松陰の書簡史料に「道家隆介宛」があり、そこには象山塾での様子が記されている（大和書房版『吉田松陰全集』第7巻、1972年、162頁）。さらに「証正及門録」同資料では、「菅原幾三郎」は「菅沼幾三郎」とある。また、「生田彦次郎」の入門は、「証正及門録」において確認することができない。

(22) 前掲「訂正及門録」（信濃教育会編『増訂象山全集』第5巻に所収）には、嘉永4年の項に「川島鋭次郎」、同6年の項に「河島永次郎」と記載されているが、これら兩名は明らかに明治維新後に「川島」から「三島」に改姓した「三島億二郎」を指すものであり、「訂正及門録」における複数の記載は、同一人物の重記と考えられる。なお、「訂正及門録」には、なぜ、幾人もの同一人物の重記が生じたのかという問題に関しては、前掲の拙稿「象山研究史上の問題点（上）」で詳細に検討しているので、同論文を参照されたい。

(23) 象山の越後行きの経緯、また、その折りの虎三郎の父親である小林誠斎との出会いについては、宮本仲『佐久間象山』（岩波書店、1932年、）には、次のように記されている。

「天保九年閏四月、先生は藩の内用を帯びて越後国に遊んだ。此行新潟、水原、新発田に至り、転じて弥彦、柏崎、今町直江津を経て五月末日に松代へ帰った。北遊稿の詩は此時の作である。蓋し北遊の使命は、越後の豪商市島氏を説いて、藩の借款を起こそうとしたものらしい。（中略）此時、長岡七万四千石の城主牧野備前守忠雅の家臣小林誠斎（通称又兵衛、文武両道に達し殊に詩文を能くせりといふ）と懇意となった。」
（同上書、77—78頁）

(24) 象山の処女論文ともいふべき「学政意見書」（正式名称は「学政意見書並びに藩老矢沢監物に呈する書」）は、最初の江戸遊学から帰藩した翌年の天保8年（1837）5月、つまり象山26歳のときに書かれたものである。このとき彼は、松代藩の「御城付月次講釈助」という役職にあった。朱子学をもって正学とする彼は、松代藩に朱子学を振興して政道を正すべく、「治道の根本」である学校を興し、もって人材を育成し登用する重要性を主張して、学政改革のための「学政策」および「学堂規則」を建言した。そこには、朱子学者としての大成を期そうとする新進気鋭の青年学徒としての象山の、朱子学による理想的な藩社会の実現という学問的課題が、現実的な政治課題と密接する問題として具体的に論究されていた。

(25) 小金井権三郎（1855—1925）は、虎三郎の妹・幸（ゆき、長岡藩士・小金井良達の妻）の長男。その実弟が、東京帝国大学医学部教授の小金井良精（1858—1944）である。権

三郎は、慶應義塾に学び、帰郷後は美談「米百俵」に縁の深い阪之上小学校の校長を務めた。だが、その後、教職を辞して上京、母校・慶應義塾の創立者である福沢諭吉が創刊した新聞社「時事新報」の記者となった。さらに明治26年（1893）には第1回衆議院議員選挙に出馬し当選した。伯父である虎三郎の17回忌に当たる同年、権三郎は実弟の良精と共に虎三郎の遺稿を蒐集して編集し、翌27年4月、『求志洞遺稿』と名付けて刊行した。

(26) 前掲『求志洞遺稿』所収の「小林寒翠翁略伝」（同書、1丁表—5丁裏）。原漢文は以下の通りである。

「父誠齋、職奉新潟之日。邂逅象山。一面如旧。交情甚厚。且服象山博識多通議論卓越。以為児託受教者。世独有斯人耳。因乞之象山。象山許之。是以隨從象山也。」

（同上、1丁表—1丁裏）

(27) 前掲、象山門人帳資料「訂正及門録」（前掲『象山全集』第5巻、766頁）。

(28) 前掲『求志洞遺稿』所収の「小林寒翠翁略伝」、同書、1丁裏。

(29) 『長岡市史』の「通史編」上巻（長岡市、1996年）、627頁。

(30) 今泉省三『長岡の歴史』第6巻（野島出版、1972年）、175—176頁を参照。

(31) 萩原緑野（1795—1854）、字は公寵、号は静軒、敬齋など。儒学者であった父親・萩原大麓の家学を継承して江戸日本橋に私塾を開き、蘭学の大家であった杉田成卿（1817—1859、杉田玄白の孫）などの門人に教授した。前掲の今泉省三『長岡の歴史』第6巻、175—176頁を参照。

(32) 拙稿「象山の蘭学学習とその教育的展開」（『創価大学創立十五周年記念論文集』所収、1985年）を参照。

(33) 江戸時代の私塾においては、同時に複数の私塾に在学すること、あるいは他の私塾に移動入塾することなどは、学習者の自由意志に任されていた。それ故、江戸の象山塾には、長岡藩の菅沼幾三郎が伊東玄朴の象先堂（嘉永4年2月入門）を経て移動入門（嘉永6年）している。西洋軍事科学系でも、高島秋帆の西洋砲術塾から木村軍太郎（佐倉藩）や斎藤碩五郎（同）が、江川坦庵の西洋砲術塾から金児忠兵衛（松代藩）や兼松繁蔵（佐倉藩）が、象山塾に移動入門した。また、西洋医学系でも、緒方洪庵の適塾から武田斐三郎（大州藩）や村上代三郎（姫路藩）、橋本左内（福井藩）などが、象先堂からも長岡藩の菅沼幾三郎の他に高島五郎（徳島藩）や小寺常之助（大垣藩）が、相次いで象山塾に移っていた。

(34) 前掲、拙稿「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者」を参照。

- (35) 同上、拙稿「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者」を参照。
- (36) 同上、拙稿「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者」を参照。
- (37) 多くの場合、象山塾入門の目的が西洋砲術（兵学）の修得にあったことについては、津田真道の場合は「東京学士会院会員津田真道の伝」（『東京学士会院雑誌』（第十五編之六）、1893年）を参照。なお、加藤弘之の場合は、自ら象山塾入門についての経緯を、「先考は西洋兵学の学習を急務とせられて、そこで又佐久間象山先生の門に入らしめられた」「沖津藩の横山犀蔵といふ人は甲州流の外に佐久間先生の門人となって西洋兵学をも研究して居られたので其人の紹介で始めて佐久間先生の庭に入門した」と、本人自身が証言している（「象山先生につきて」、信濃教育会雑誌『信濃教育』の「佐久間先生五十年祭記念号」に所収、1913年）。なお、同様の証言が、『弘之自伝』（1915年）にも記載されている。
- (38) 幕末期日本における洋学の普及拡大という歴史的現象を、国防的動機による西洋軍事科学の学習者の急増という教育史的観点から、幕末期土佐藩史料を中心に解説分析した実証的研究の成果としては、拙著『幕末洋学教育史研究』（高知市民図書館出版、2004年）がある。
- (39) 西村茂樹「往事録」（『西村茂樹全集』第3巻、491—492頁）。
- (40) 象山は、天保10年（1839）2月の再度の江戸遊学を契機に、江戸神田の阿玉池畔に朱子学者象山の誕生を宣言する漢学塾（玉池書院、象山書院）を開いた。だが、その翌年に、象山の運命を左右する一大事件となるアヘン戦争が隣国の清朝中国に勃発する。このアヘン戦争を機に、象山は蘭学の学習に向かい、奮闘努力の末に蘭語原書を読解できるほどのオランダ語の語学力を修得した。そして嘉永3年（1850）から西洋砲術の教授活動をはじめたが、早くもその年に勝海舟や坂本龍馬などが入門している。翌年の嘉永4年5月には、一般には西洋砲術・西洋兵学の私塾とみなされる独立した塾舎を構えた私塾を、江戸木挽町に開設する。象山がアヘン戦争を挟んで開設した二つの私塾の関係性を巡る問題については、前掲の拙稿「象山研究史上の問題点（上）」を参照されたい。
- (41) 前掲、拙稿「象山の蘭学学習とその教育的展開」を参照。
- (42) 象山自身、「砲術門人二三百人に相成候は遠からずと存じ申候（中略）況や儒業並に西洋学の門人も有之候」（前掲『象山全集』第3巻、585頁）と記しており、象山塾には砲術門人、儒学門人、洋学門人の3種が存在したことを十分に承知して対応していたことがわかる。この点に関する詳細な検討は、前掲の拙稿「門人帳資料『訂正及門録』からみた

象山塾の入門者」を参照されたい。

- (43) 門人吉田松陰の証言は、「嘉永四年十月二十三日付、叔父玉木文之進宛書簡」（前掲『吉田松陰全集』第7巻、103頁。）。
- (44) 同上『吉田松陰全集』第7巻に所収の叔父玉木文之進宛書簡（嘉永4年、103頁）。
- (45) 前掲、『象山全集』第4巻所収の「小林又兵衛宛書簡」（242頁）。
- (46) 同上「小林又兵衛宛書簡」、242頁。
- (47) 吉田松陰「野山獄文稿」（前掲『吉田松陰全集』第2巻、343頁）。昭和戦前に評論家として活躍した横山健堂（1872—1943）は、『旧藩と人物』（大文館書店、1926）で、象山門下の吉田松陰と小林虎三郎の人物評を次のように記している。

「佐久間の門に二秀才あり。吉田寅次郎と長岡の小林虎三郎と也。象山門下の二虎を以て目せられる。吉田は百代に著聞し、小林は未だ人に知られず。象山つねに、吉田の胆略、小林の学識を推して稀世の器とす。嘗ていふ、天下に大事を為すべきものは義卿なるべく、六尺の弧を託すべきは炳文也と。其の子を、炳文に託して教育せしむ。炳文は則ち小林也、小林は篤厚の人、内剛、外柔、君子儒也。」

（慶応義塾福沢研究センター復刻、横山健堂『薩長土肥』、2001年、144頁）

- (48) 前掲『象山全集』第4巻に所収の「嘉永六年七月六日付、仙寺源大夫宛書簡」（同書161頁）。
- (49) 前掲『吉田松陰全集』第6巻に所収の「嘉永六年六月六日付、道家龍助宛書簡」、161頁。
- (50) 天保13年（1842）11月の象山「上書」。正式名称は「感応公に上りて天下当今の要務を陳ず」（前掲『象山全集』第2巻、25—53頁）。
- (51) 象山は、嘉永6年（1853）6月のペリー来航に際して、幕府老中職にあった藩主真田幸貫の名をもって老中首座の阿部正弘宛に「上書案」を草した（前掲『象山全集』第2巻、125—127頁）。
- (52) 松陰著「幽囚録」（前掲『松陰全集』第2巻、42頁）。なお、このときの象山の主張した横浜開港説の具体的な内容は、象山自身の獄中記『省魯録』に詳述されている（前掲『象山全集 I』第1巻、16—17頁）。
- (53) 若月赴夫『長岡の先賢』（互尊文庫、1941年）、102頁。
- (54) 同上『長岡の先賢』、102頁。なお、三島に関して最も信頼できる著書は、今泉省三の労作『三島億二郎』（覚張書店、1957年）である。同書には、三島が処罰されたことについて、「一書生の身をもって藩政を論議するのは不埒至極とのことで安政元年正月十九

日御目付格を免ぜられ、帰藩を命ぜられた」（同書、21頁）と記されている。

- (55) 前掲『求志洞遺稿』の「詩」の部、3丁表。
- (56) 象山『省儻録』（前掲『象山全集』第1巻、17頁）。原文は漢文で、読み下し文は岩波文庫版『省儻録』（43－44頁）を参照。
- (57) 松陰「幽囚録」（前掲『吉田松陰全集』第2巻、4頁）。
- (58) 『ペルリ提督日本遠征記』（弘文堂、1936年）の下巻、703－704頁。
- (59) 虎三郎は、明治4年に郷里長岡を辞して東京に上った後、小学校の歴史教科書としての大著『小学国史』（全12巻）を独力で編輯し、同6年から翌7年にかけて刊行した。この著作活動は、同じ7年に中国で刊行される漢書『大徳国学校論略』の日本への翻刊活動と共に、彼の晩年における主要な活動であり、そこに彼がめざした教育的思想世界が具体化されている。それ故、筆者は、彼が漢書『大徳国学校論略』を翻刻した意図とその内容や特徴の分析を試み、その詳細な考察の結果は、別稿「明治初期日本近代化を巡るドイツと中国の歴史的位罫」（世界教育日本協会『教育新世界』第30号（1990年11月）、列びに「漢書『大徳国学校論略』の明治日本への翻刻紹介」（信州大学、坂本保富研究室、平成19年度前期『研究報告書』第6号に所収、2007年9月）として発表した。
- (60) 虎三郎編著『小学国史』（巻之十二「第百二十一代孝明天皇」の項）。
- (61) 前掲『象山全集』第1巻に所収の「象山浄稿」（同書、51頁）。
- (62) 筆者の提示する「儒学的洋学受容論」という概念に関しては、拙稿「象山における儒学理解への前提と特質―幕末期における儒学的洋学受容論成立への主体形成―」（筑波大学『教育学研究集』第2集、1979年）を参照されたい。
- (63) 前掲『象山全集』第4巻に所収の安政4年12月26日付「山寺源大夫宛書簡（同書、663頁）。
- (64) 前掲『求志洞遺稿』の「詩」の部、8丁表。
- (65) 虎三郎の実験実証を重視する科学的な学問態度は、恩師である象山の塾教育における教育実践を貫く教育的信念であった。例えば、象山は、門人の松陰が同じ長州藩の友人を象山塾に案内した折り、その客人が象山に質問した。そのとき象山は、次のように理路整然と教え諭している。

「合金のこと西洋には銅へ錫を交るまでに御座候。銅の性はねばりあるものなり。故に迸炸ほうさの患なし。然れども性矛なれば巢中あれ安し。故に錫を入るるは其の性を剛直してあれざる様にする為なり。然れども錫過ぐれば金もろくして又迸炸の患あり。

トタンは入らぬものと承れり。是れ耳学なり。未だ深く金類分離術を学び申さず候間、硝石金合等の事を強ひて分弁せんと欲せば、分離術を学ばざれば事甚だ疎なり。是を以て佐久間が問難一として児玉答ふること能はず。徒らに切齒するのみ。」

(『吉田松陰全集』第7巻、嘉永6年9月10日付書簡「叔父玉木文之進宛」、193-194頁)

(66) 松陰「幽囚録」の「跋」(前掲『吉田松陰全集』第2巻、70頁)。

(67) 松陰「幽囚録」は、前掲『松陰全集』第2巻に所収(39-91頁)。長州萩の野山獄に囚われの身となった松陰は、江戸伝馬町の牢獄で恩師象山と惜別してから3年近くの歳月が過ぎた安政3年9月、獄吏に紙筆を請い求めて、労作「幽囚録」を執筆した。松陰は、この草稿を直ちに信州松代で蟄居中の恩師象山に送り届けたのである。

(68) 象山は、松陰の「幽囚録」を精読して、これに朱筆を入れ、詳細な添削を施した。そして、その出来栄を讃えて、次のような論評を添書した。

「義卿(松陰)遠く此の録を寄す。其の見る所全然余と同じ。嗚呼、三千里外、期せずして余が賦の為に此の疏証を作る。はからざりき、神交の深き、終に此に至らんとは。」
(前掲『松陰全集』第2巻、69頁)

(69) 虎三郎の「興学私議」は、『求志洞遺稿』に所収(2丁裏-8丁裏)。原文は漢文であるが、読み下し文で引用した。なお、漢文の読み下し文は、前述のごとく「小林安治訳」(長岡市史発行の「長岡市史双書」第34号、1995年、)を参考の基本とし、さらに「尾形裕康訳」(尾形裕康『学制成立史の研究』校倉書房、1973年)と比較検討しながら解説した。

(70) 前掲『求志洞遺稿』の「文」の部、2丁表。原漢文は次の通りである。

「中国受虜之侮久矣。昔嘗狎安憚勞。不求所以之禦之方。及有癸丑墨夷之事。然後知祖宗故事。無以濟當時。而變通更革之不可以已也。於是一旦令發。水陸兵制。堡台之備。皇砲巨艦。以至凡百器械之細。皆取則於荷蘭。既而招致其人。受操舟揖練水兵之法。又置武学。建蕃書院。設之教師以育多士。凡彼諸学科。皆得隨其力所及而治之。蓋其意全在於取彼長所。補我所短。以振我勢。而一毫固執之私。不雜於其間也。宜其兵制整。堡台嚴。砲舶悉具。器械尽利。既足以禦虜之侮。而人材日長。国駸々乎趨疆矣。然而其効未顯。虜見其若是如也。滋以驕肆。我唯惴々焉懼一物之不適其欲。而或激其怒。此其故何也。」

(71) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、2丁表。原漢文は「取彼長所。補我所短。以振我勢。」

(72) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、3丁表-3丁裏。原漢文は次の通りである。

「学政一付諸儒臣。不復措意。而其他文武之学。礼付諸礼家。樂付諸樂家。兵付諸兵家。

至於射御書數刀鎗醫方凡百之學。亦皆付諸射家御家書家數家之類。而任人々為之。故學者各々張私見。不知求其要。是以天下之學。非固則虛其適於用。蓋無幾爾。然而授官任職。又唯以閱閱資序。而學與材則不問。故不達治道而任執政者有之。不習食貨而為司農者有之。不知兵而管三衛者有之。不學律而為理官者有之。不曉工而為大匠者有之。推是類也。指不勝僂。學之不明。人材之不振。文武百官之不得其人。豈有甚乎此者也耶。」

(73) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、3丁裏。原漢文は次の通りである。

「東西諸蕃。其道淺陋。其俗貧鄙。雖遠不及中國之美。然至其所發明諸學。則探幽微。窮精緻。裨益家國民生。中國之所未嘗有。而其設學育材。分職考課。又莫不詳且悉。是以內焉修政事。理材用。課百工。外焉交外國通貿易。出師旅。莫有廢事。國以富。兵以強。橫行四海。而無能禁者。」

(74) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、3丁裏。原漢文は次の通りである。

「彼其自視太驕。而見中國之不己若也。以為是可愚矣。乃陸續而至。出不遜之語。示跳梁之態。而中國莫奈何。」

(75) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、4丁表。原漢文は「今以中國人材之不振。文武百官之不得其人。域內之政。猶且有所欲舉而不能。」

(76) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、4丁表。原漢文は「一旦欲悉收彼學。以振國勢。其無所成者。亦莫惑爾。」

(77) 『求志洞遺稿』の「文」の部、4丁裏。原漢文は「文武百官、率皆不學。其職皆為虛也。夫當今之患如此。」

(78) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、4丁裏—5丁表。原漢文は「在広教養以育人材。官制而修專任使而已。」

(79) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、5丁表。原漢文は「何謂広教養以育人材。夫學之事二。道也爾、芸也爾。道以明體。芸以達用。不可相離也。」

(80) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、5丁表。原漢文は次の通りである。

「今、都府之學三。曰大學。曰武學。曰蕃書院。大學所教主道。而武學與蕃書院。則芸而已矣。然而三者不相為謀。若胡越然。此固已失矣。而況三者皆未得其宜。如前所言乎。今欲修舉之。三者集諸一所。皆擴大其堂廡屋舍垣墻之制。在學。則增教師而嚴其選。國史制度律令格式之學。國家禮學兵刑食貨之籍。皆屬諸此。考之古法。斟酌時勢。以設科分局。要在去華而得實。若夫武學與蕃書院。其所教之芸。率取諸彼。則其設科分

局。固亦宜倣焉。而教導乏人、則遣生徒學於彼。與雇教師於彼。又皆不可不速行。所遣生徒拾歲以上。四拾以下。挾俊爽彊敏者。五人為保。保有長。立總長。督其勤惰。所雇教師。每科數人。分居各局。諸學科所用圖書器械。又皆購諸彼。配置各局。莫不悉備焉。」

(81) 同上『求志洞遺稿』の「文」、5丁裏。原漢文は次の通りである。

「然猶有宜舉者。小学是也。夫長而學。孰若小而習之易入。故先王殊重小学之教。而近聞外蕃導幼蒙之法。又極其詳。今於都府建小学數所。士大夫之子弟。年至七八歲。皆入諸此。而教以六書之學。四子六經之文。兼外蕃所以導幼蒙者。及其長也。進之三學。則受教有地。而材可以達焉。夫如是。然後都府之學備矣。」

(82) すでに注(13)でみたように、象山の學問と思想は、当初から政治理想の実現を教育に求めるといふ儒學思想に内在する學問的性格を特徴としていた。したがって、その後の彼の、松代藩や幕府当局に対する「上書」などに示された政治改革案においても、数々の教育的施策が提言されていた。その基本的な発想は、学校教育の普及による人材の育成登用と人民の教化啓蒙をはかり、よって理想社会を実現するということ、儒學思想にあった。アヘン戦争直後の天保13年に書かれた「上書」においても、彼は「急務八策」の一つとして「辺鄙の浦々里々に至り候迄、学校を興し教化を盛に仕」という全国規模での学校教育の制度的確立の必要性を主張していた。さらに文久2年(1862)の「幕府宛上書稿」でも、同様の考えを具体化して国民教育の急務であることを論じ、「学校の建方も教方も東西諸蕃の制宜しく被存候」と、西洋先進国をモデルとした学校教育制度の導入実施を提言していた。

以上のような象山の學政改革案を踏襲して、虎三郎は自身の教育理想と教育改革案を「興學私議」にまとめ上げたわけである。

(83) 大島の学校教育構想は、彼が文久3年(1863)に南部藩庁に提出した「藩政改革上申書」(大島信蔵『大島高任行実』、1938年、406頁以下に収録)に示されている。その内容は、富国強兵の実現を期した論策を主旨としているが、最も重要な前提として「人材」の養成を説き、そのための学制改革案を提示している。その内容は、教育の目的、内容、方法に関して、虎三郎の「興學私議」における学校教育の主張と基本的に類似する内容であった。

(84) 「興學私議」の末尾に付された象山評である。出典は前掲『求志洞遺稿』の「文」の部、8丁表。原漢文は「象山先生曰。小林子文。嘗從余遊。有志於明体達用之學。辭別數歲。録示此文。詞理明暢。皆有實用。可謂不負平靜之志矣。」

- (85) 八木剛助（上田藩士、1801－1872）については、佐藤堅司「佐久間象山の兵学と其の影響」（『信濃教育』第626号「佐久間先生七十五年祭記念」、1938年12月）および『三百藩人物事典』（新人物往来社、第3巻）を参照。同じく上田藩の山田貫兵衛（1813－1872）に関しては、『三百藩人物事典』（新人物往来社、第3巻）を参照。また、大野藩の広田憲寛（1818－1888）については、『蘭学資料研究会会報』（第185号）をはじめ、『福井県大野郡誌（下）』『大野郡人物誌』『越前人物誌』、さらには笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』などの諸書を参照した。同じく大野藩の内山隆^{りゅうすけ}左（1812－1864）に関しても、『蘭学資料研究会会報』（第183号）、『福井県大野都誌（下）』『大野郡人物誌』『越前人物誌』、そして笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』『近世藩校に於ける出版書の研究』、さらに『大学々生溯源』（明治43年、日報社）『福井県教育史』『内山降左翁略伝 付詩文抄』（石川三吾編、明治29年）、『維新海軍の人々』（田村栄太郎、昭和18年、北海出版）などを参照した。さらに出石藩の大島貞薫（万兵衛、1806－1888）については、前掲の佐藤論文「佐久間象山の兵学と其の影響」（『信濃教育』をはじめ、「象山先生七十五年祭記念」）その他を参照した。
- (86) 虎三郎の蘭書翻訳の作品は、前掲『求志洞遺稿』に収録された関係史料「重学訓蒙の序」「察地小言の序」「野戦要務通則一斑の序」「泰西兵餉一斑の序」などによって確認できる。なお、山本有三『米百俵』に所収の「そえがき」でも、虎三郎の蘭書翻訳について紹介されている（同書、191－197頁）。また、虎三郎の手書きの翻訳草稿『察地小言』だけは、長岡市立中央図書館文書資料室に現存している。筆者は、それを写真版で入手して解読し、別の拙稿（「幕末維新时期におけるオランダ原書の翻訳活動－日本近代化と象山門人・小林虎三郎の軌跡－」）で発表する予定である。
- (87) 前掲「小林寒翠翁略伝」には、「斯の種、和蘭の兵書を翻訳し、諸藩士に示す。当時、長岡の兵制改革、翁（虎三郎）の指示に由る。益を得たる者多しと云ふ。」と記されている。
- (88) 前掲『長岡藩史話』には、「慶応の初め、藩庁に於いては、その兵制の改革に先だつて先ず藩の有識者にその意見を徴した。すなわち鶴殿団次郎（春風）、小林虎三郎（病翁）等の意見書がこれである」（同書、199頁）と叙述されている。
- (89) 藩老の牧野市右衛門宛に提出された虎三郎の意見書の概要が、同上『長岡藩史話』（205－207頁）に収められている。
- (90) 同上『長岡藩史話』、206頁。
- (91) 同上『長岡藩史話』、207頁。

(92) 前掲『求志洞遺稿』の「略伝」、3丁表－3丁裏）。原漢文は次の通り。

「長岡藩中。与翁馳名声者。鶴殿団次郎。河井継之助。川島億二郎等。鶴殿被徵幕下。為目付役。与勝安房等。共与幕議。以故不常在藩。河井川島与翁共議藩政。迭上下其論。然以翁多在病床。不能施行持論。川島亦与翁同意。独河井反之。且以才弁衆服。遂昇顯職。掌握藩政。方官軍臨越。藩師誤方針者。皆出於河井之意。多亡壯士。其身亦戰没。可不慨哉。方是時。翁屢々論河井失政。然臥病不能達其說。徒仰天浩嘆耳。蓋河井執藩政也。雖權力盛於一時。至学力道德。不及於翁遠矣。以故平素忌避翁。不用其說。翁亦知其論不容。不敢与藩政。至王政復古之日。唯々養病閉居一室。」

(93) 戊辰戦争による長岡藩内の被災状況については、同上『長岡藩史話』（290－293頁）を参照。

(94) 戊辰戦争の後に迎えた最初の冬、戦場や避難地から長岡に戻った藩士家族の悲惨な生活状況が、「時はすでに十二月、しかも雪は五、六尺に及んで住むに家なく、食するに米塩もなかったから、たゞ呆然と手をこまねいて窮地のどん底にたゞずむより外に術はなかった。」（前掲『長岡藩史話』、293頁）と記されている。

(95) 同上『長岡藩史話』、307頁（実弟の小林雄七郎宛の書簡）。

(96) 戊辰戦争の直後における長岡藩の職制改革については、同上『長岡藩史話』（296－302頁）を参照。

(97) 同上『長岡藩史話』、303－305頁。なお、この改正で、先に「文武局」を担当していた虎三郎は、新たに藩の執政（旧家老職に相当する大参事）として藩政全体を統括する役務の外に、従前の「督学」としての教育担当の責任者をも兼ねることとなった。

(98) 郷土長岡の復興と発展に果した三島億二郎の業績については、前掲の今泉省三『三島億二郎伝』を参照。

(99) 戊辰戦後における藩立学校の再開と新校舎創設に関する逸話「米百俵」の誕生の経緯については、拙著『米百俵の歴史学』（学文社、2006年）に詳述してあるので参照されたい。

(100) 北越新報社編『長岡教育史料』（北越新報社、1917年）に所収の西郷葆（虎三郎校長の下での国漢学校の教員）の回顧談「国漢学校と小学校」、同書15頁。

(101) 同上『長岡教育史料』に所収の国漢学校卒業生である渡邊廉吉（1854－1925、伊藤博文内閣総理大臣の秘書官や行政裁判所評定員などを歴任、貴族院議員）の回顧談「崇徳館と国漢学校」、同書9頁。

(102) 佐久間象山『省魯録』（前掲『象山全集』第1巻、21頁）。

(追記)

本稿は、20年近くも前の旧稿（「米百俵に描かれた小林虎三郎の教育的思想世界（I）－「東洋道徳・西洋芸術」思想を媒介とした「興学私議」の成立とその展開－）（創価大学『教育学部論集』第29号、1991年）を、長年の「米百俵」研究の集大成を期した近刊予定の拙著『米百俵の主人公 小林虎三郎－日本近代化と象山門人の軌跡－』に収録するために、記述内容や引用資料などの抜本的な見直しをはかり、大幅に加筆訂正した論文である。

あとがき

公私共に激動の日々に明け暮れた本年度も、何とか『研究報告書』（通巻第8号）を刊行することができた。本号に収載した論文は、「教育立国思想『興学私議』の形成と展開—日本近代化と米百俵の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡(Ⅲ)—」である。この論文は、近く刊行する予定の拙著『米百俵の主人公 小林虎三郎—日本近代化と象山門人の教育的軌跡—』（仮題）に収録される論文である。刊行予定の同書は、2年前に出版した拙著『米百俵の歴史学』（学文社）に続くもので、筆者の長年にわたる「米百俵研究」を集大成した研究書である。

史実「米百俵」の美談は、遠くは太平洋戦争中の昭和18年に出版された文豪・山本有三の戯曲によって発掘・紹介され、近年では小泉純一郎元首相の就任演説（平成13年5月）に引用され、以来、周く日本の内外に知られるところとなった。明治の夜明けに勃発した戊辰戦争で官軍に敗れ、廃墟となった越後長岡藩で、分家の越後三根山藩（新潟市峰岡）から恵送されてきた救援米「米百俵」を、長岡の戦後復興を任せられた大参事（旧家老職）の小林虎三郎（1828-1877）は、「食えないから学校を建て人材を育てるのだ」と言って一粒も分配せず、郷土復興の基礎となる人材育成のための学校建設費に充当した、という感動的な逸話である。

主人公の虎三郎は、幕末期の日本を代表する開明的な思想家として知られる佐久間象山（信州松代藩、1811-1864）の門人である。多士済々な象山門人の中にあつて、彼は、吉田松陰（長州萩藩、1830-1859）と並び称される人物で、謹厳実直、刻苦勉勵の秀才であった。実は、その彼は、幕末維新时期の日本近代化過程において、地道ではあるが国家レベルでの様々な教育的活動を展開して生きたのである。日本の近代化、とりわけ教育の近代化に関わって展開された彼の教育的人生の全体からみれば、美談「米百俵」の史実は単なる断片に過ぎないものであった。

これまで、主人公である虎三郎の思想や行動の全体像は、ほとんど知られてこなかった。本誌に掲載した論文は、恩師象山が提唱し実践した日本近代化の思想「東洋道徳・西洋芸術」を最も誠実に学び取り、その遺志を継承して日本の近代化過程に具体化して生きた主人公の教育的軌跡の全体像を解明すべく、その手始めとして彼の思想と活動の原点となった処女論文「興学私議」の形成過程と戊辰戦後の長岡復興への具体化の実際を明らかにす

ること、を意図したものである。

国立大学が平成16年に法人化されて以来、学生に対する教育の改善充実が声高に叫ばれ、まさにサービス業としての大学の効率的な民営化が急速に推し進められている。研究費の激減は言うに及ばず、大学での勤務時間に研究室で研究論文を書くことすらも気兼ねするような厳しい状況となった。まさに、研究者、受難の時代である。加えて、大学の管理職の末端に組み込まれた筆者は、会議と書類に追われる毎日である。研究者が研究に専念できない。何と不幸なことか。あたかも歌を忘れたカナリアのようで、生きていること自体が虚しく、そして切なく感じられる。

ところで、私事に亘って誠に恐縮であるが、昨年の春3月、筆者の育ての親である実姉が急逝した。享年67。追い打ちをかけるように、その姉の長女で妹のように可愛がってきた姪が、今年の正月2日、同じ病（脳動脈瘤破裂によるクモ膜下失血）で他界した。享年44。同じ病気で、8年前に実弟が48歳で急逝。次々と、身内が彼岸に旅立ってしまう。何と惨いことか。人間存在の儚さと虚しさを痛感して、悲歎に暮れる昨今である。だが、所詮、研究に生きてきた者は、研究によってしか甦ることはできない。そう、還暦を過ぎた己に言い聞かせながら、研究的人生の仕上げに再起したいと念じている。このような公私共に閉塞した状況の中で、蘇りの第一歩として、何とか本年度の研究報告書を刊行することができた。とりわけ、思い出深い一冊となった。御高覧いただければ幸甚に存じます。

平成21年3月6日

信州大学の研究室にて 坂本保富